

よくく結ぶの神にさへ、見放されたる憂き身かと、心の内に口説泣、女心ぞいぢらしき。「ヲ何をくよく思召す。親旦那様のお歸りに間も有るまい、是から奥の離れ座敷で、楓を相手に琴の組でも遊ばしたら、お氣慰にも成りませう。サアくお出で遊ばしませ」と、姫どもに誘ははれ、心浮かねどしをくくと、是非もなけ首立つて行く。かゝる折から立關先「蘆柄傳藏様御入」と、呼はる程もあらしく、疊ざはりも無骨の蘆柄、肩で風切る勿體顔、押柄らしく打通る。かくと聞いてや主の妻、操は出迎ひ會釋して、「コレハく傳藏様、ようこそく。先々あれへ」に上座に著き、をさめた顔に操は手をつき、「夫弓之助殿は殿の御召にて登城の留守、それ故お出迎ひも申しませぬ。シテ只今は何の御用」と、尋ねに傳藏扇を鳴らし、「イヤ只今參る事別儀でござらぬ、當家の息女深雪殿、いまだ定る聲がねもなきよし、幸ひ拙者も無妻なれば、殿へ内々縁談の儀を願ひし處、似合はしき儀と有つて、お蘭の方を以て、弓之助殿へ其越申渡されしに、有無の返答にも及ばず、病氣と云立て御暇を願ひ、國を立退かれしゆゑ、縁談の儀は其儘に相成りしが、此度歸參召されしゆゑ、度々仲人をもつて縁邊の事を申入るれども、酔のこんにやくのと埒のあかぬ返答、それゆゑ今日は直々推參致した。御前まで願ひし縁談違變あつては、此傳藏が武士が相立ち申さぬ。否や應の一口商ひ、只今返答承らう」

と、權威を鼻にてつべい押、小面憎さも女氣に、じつとこたへて、「ホ、ハ、ハ、コレハマア、見る影もない娘を御所望に預るは、何ほうか御嬉しう存じますれど、縁の事は親我意にもなりませぬ。殊に夫も留守なれば、只今と申しては「イヤサ、弓之助殿は留主にもせよ、女の子は母次第、其元さへ得心あつて、御息女へお勧めあらば、ツイ埒の明く事。當時殿の御氣に入りのお蘭の方は拙者が姉、其弟たる身どもを聲にとられなば、弓之助殿の肩身もいかると申すもの」と、半分聞かず、「イヤ申し傳藏様、身不肖にはござりますれど、娘の縁に連れて出世を望むやうな弓之助ではござりませぬ。其一言を弓之助承らば、たとへ娘が得心致しても、此縁組はお斷と申すは定。マそれはともあれ、此頃娘は病氣に取合せますれば、本復の上それとも談合いたし、否やの御返事致しましよ」「ヤアぬけく」と其手はくはぬ。誠病氣か病氣でないか、此上は身が直々に改めん」と、ずんど立てば操もせき立ち、「ヤア舌長なり傳藏殿、間狭なれども此屋鋪は弓之助が城廓、ならば手柄に踏込んでお改めあれ。女ながらも武士の妻、お相手に成りませう」と、云ひつと長押に掛けたる長刀、おつ取つて鞘振りはづし、小脇にかい込む身構に、さしもの蘆柄仰天し、「ア、コレハ又短氣千萬、改めて悪くばさう云うて濟む事、達てと申すでもござらぬわけ。誠息女が病氣ならば、随分お氣を付け召され。縁邊の儀は又追

つて」と、始の擬勢引きかへて、挨拶さへもろくくくに、先がけられし目なし碁の、片手打たれし如くにて、すごくとして立歸る。かくて時刻も推移り、常にかはつていそくと、立ちかへる秋月弓之助。それと操は手をつかへ、「コレハく只今お下りか、いつにないお隙どり、御前の首尾はいかゞござります」と、尋ねに機嫌のうちにつこり、「イヤモ悦び召され、お上の首尾は極上々。此度國元の一揆を相鎮めし事、殿には一しほ御賞美あつて、先地の上に二百石の御加増。イヤモ殊の外御機嫌にて、御悦びの盃まで下された。然るに大内家の家臣、駒澤次郎左衛門といふ武士、使者に來つて共に相伴、盃の取やりの内つくく見るに、人品骨柄天晴の若者、しかも文武兩道の達人なれば、殿も甚御賞美あつて、汝が娘の聲に致せよとの御意。かの駒澤も承知の體ゆる、諸士の手前面目是に過ぎず、御前に於て堅めの盃まで取りかはし申した。娘には過分の聲、おことも安堵しめされ」と、いふに操は、「ソナラ殿様のお仲人で」「チ、サ大名のお仲人にて聲をとる娘は大仕合せ者、聲の顔を見をつたら、嘸悦びをらう」と、父の悦び母親は、娘の心はかりかね、案じる胸もそれぞとは、明けていはれぬ此場の思ひ、「イヤ申し我夫、殿様の御仲人とは申しながら、娘にもとくと云聞かした上で、云約束はなさらぬで、あんまりさつきやくではござりませぬか」「イヤサ某も其氣のつかぬでは

なければども、御前の仰といひ、日本一の上々聲、拳を以て大地を打ちはずすとも、娘の氣に入るは定のもの、安堵して娘に云聞かせ召され。ヤレく餘り悦ばしさに、思はず酒を過し餘程酩酊、ドレ暫時一休み」と、刀を提げて機嫌顔、居間をさしてぞ入りにけり。跡に操はとやかに、娘の心はかりかね、千々の思案にくれ告ぐる、柱時計の音さへも、胸にどきつく物案じ、差うつむいて居たりしが、煙管相手の獨言、「今の夫の詞では、御上の御意にかよつた縁組、娘思ひの我夫が、見極めての云約束、鹿相のあらう様はなけれど、只案じるは娘の事。いつぞや宇治の螢狩に、見初めた人は宮城阿曾次郎殿と、娘どもが噂、立花桂庵の仲人で、連れて來たは賣僧者、どうぞ元の阿曾次郎殿の行方を尋ね、娘に添はしてやりたいと思へども、肝心の所を知らず、どうかかかかと思ふ矢先、さしかよつた縁結び、一旦夫が御前にて、お受申した上からは、今更どうも變がへならず。此上は娘に譯を云聞かせ、得心さすが上分別さうぢやく」と打うなづき、「娘々」と呼ぶ聲に、「アイ」と返事はしながらも、晴れぬ思ひにくよくくと、打しをれたる娘の深雪、奥より立出で傍により、「母様何の御用」とうかどへば、母はにつこり、「チヲけふは髪のかざりもけうとう好うできました。思ひなしか氣合もよささうで、マア嬉しい。シタガ娘や、今呼んだは外の事でもない、背たけ延びたそなた、いつくまでも一人置くは病氣

のもとる、それゆゑそなたによい聲を呼迎へる分別」と、半分聞かず、「ム、アノわたしにかへ」「チイなう」「イエ、わたしやチト様子有つて、殿御持つ事はいやでござんす」「チ、さういやるは宮城阿曾次郎殿へ心底が立たぬと思やるか」「エ、」「サかういへば悔りしやらうが、いつぞや宇治の螢狩に、宮城阿曾次郎殿と云約束をしやつた噂は、娘どもにうすくと聞及べど、云出すはけふがはじめ。どうぞ其阿曾次郎殿に添はしたいとは思へども、肝心の國所は知れず、何所を證據に尋ねうやうもなし。然るにけふ弓之助殿登城の折から、大内家より御使者駒澤治郎左衛門といふ人、器量骨柄揃ひし天晴の武士と、殿様には殊の外御賞美あり、秋月弓之助が娘に見合し、跡目相續させよとの御意。夫もよい聲と氣に入り、御受申して聲舅の盃まで取りかはして歸られ、娘にとくと云聞かし、得心させよとの、殿様のお仲人と云ひ、娘思ひの爺御の氣に叶うた聲がね。様子といふは此事ぢやわいなう」「エ、そんなら殿様のお仲人で」ハアはつとばかりに心の當惑、何と返事をせん方も、なみださしくむばかりなり。「チ、顔を知らねば案じやるも無理ならねど、聲えらみの夫、何のそなたの氣にいらぬやうな聲をとられう。殊にお上の御意のかよつた晴の縁組、今更變がへのならぬ聲殿、よう得心してお受申しや」「アイ」「ヤ」「アイ」「あいとばかりではすまぬわいなう。最前も意地悪の蘆柄傳藏が來て、是非

聲にならうとの押付業、おどしを見せて歸したが、お蘭の方へ云込んで、又どのやうな難題を云ひかけうも知れぬ。邪魔の入りぬ内縁組の取極が肝心。淺香とも談合して、今宵中に返事しや。可愛いそなたに何の悪い事すゝめうぞ。只何事も親々に任して、早う返事を待つて居るぞや。ドレ其間に我夫と祝言の相談せう」と、詞を盡し母親は、奥の間へ入りけり。跡見送つて娘氣に、こらへくし溜涙、はつとばかりに泣きたさも、母に知らせじ聞かせじと、袖かみしめて忍び音に、絶入るばかり歎きしが、やうく顔を上へ、「エ、聞えませぬ母様、常々のおしめしに、貞女兩夫に見えずとの、教を守れとおつしやつた、そのお詞に引きかへて、阿曾次郎さんと私かわけ、知つて居ながら二人の夫、持てよとは胴欲な。どうした縁か知らねども、思ひ初めた阿曾次郎様、思ひきらうと思ふほど、いやます思ひ身の因果、生きてなま中うき事を、見んよりいつそ身を投けて、死んで未來で添ふが樂しみ。勿體ないは父上母様、先立つ不孝はゆるしてたべ。又二つには乳母淺香、此年月の養育の、恩もおくらす死ぬるのも、浮世の義理とあきらめて、堪忍してたもれや」と、いふもあやなき袖の雨、泣くく硯取出して、あかぬ別をする墨も、涙に薄き親と子が、歎きの種をまき紙に、書置く鹿の命毛も、やがて切れ行くはかなさに、筆の歩みも震はれて、はかどりかぬる文のあや、涙ながらに書きとど

め、封じる隙も跡先に、心おくより聲高く、「御寮人様、深雪様」と、尋ぬる乳母の浅香の聲、見咎められじと文さし置き、庭へおりしも夕暮の無常を告ぐる鐘の数、六つ四つ五つとぶ鳥、かはいくの聲々も、身にしみ渡る秋の風、ふるふ膝ふし踏みしめて、心も足も飛石傳ひ、裏道さし足落ちて行く。かくともしらす乳人浅香、手燭たづさへ立出でて、「深雪様々々々、深雪様はいづくに」と、云ひつゝ見廻す料紙のそば、落ちたる文を取上げて、何心なく見て恠り、「コリヤ深雪様の書置。奥様、申し旦那様」と、呼はる聲に弓之助、操も俱にかけ出づれば、浅香はひろけし文さし出し、「コレ申し深雪様が身を投げるとの此書置」と、半分聞かず、「ヤア〜〜書置とは氣遣ひな」と云ひつゝ操はふみおつとり、「何々みづから事、宮城阿曾次郎殿と云ひかはし〜〜へば、二度の夫をむかへ〜〜ては、貞女の道立ちがたく、不孝ながら淵川へ身を投けり〜〜と、讀む間もせき立つ弓之助、「南無三寶なしたり。しかもかよわき女の足、遠くはよも落延びじ、關助はどこにをる、早く〜〜」にかけ来る奴、「お旦那、何の御用でござります」
「コリヤ〜〜、娘深雪が身を投げんとて忍び出でしぞ、若黨下部に手分けして、跡を追かけ取止めよ」「エ、ソリヤ大變。かういふ内も氣遣ひな、朋輩どもへは浅香どの云ひ付け召され。下郎は直に」と尻引からけ、せきにせき助かけり行く、俄の騒動泣くにも泣かれず、うつむく操

乳母浅香、弓之助も氣は顛倒、娘はした若黨中間、呼びたて〜〜家内中、上を 三重下へとかへしける。

大磯揚屋の段

素見ぞめきでむく鳥が、むれつよきつよき格子先、叩く水鶏の口なめ鳥が、チ、ちつとも囀るまいとの春霞、諷ふ聲々浮立つて、たそや行燈の影光る、戀と情の中の町、分けて榮える松葉やの、座敷は絹でふき磨き、目を驚すばかりなり。此家の亭主仁左衛門、袴引上げ走り出で、「ヤレ〜〜いそがしやく〜〜、女子どもはまだ粧妝しまはぬかい。エ、べん〜〜と埒の明かぬ。けふは助大盡の御趣向で、廊中の色達を惣揚にして、大踊りとの御注文。コリヤ女ども、花も生け直さし、爐の炭もついでおけ。コリヤ〜〜やり手ども、料理場の拵へはえいかと問へ。ヤイ男ども、藝者衆急きにいけよ。皆えいか〜〜。ア、しんど、人を使ふのも大抵の事ではない」と、たくしかけたる八百萬、かみの鬘さへうなづくばかり、天窓振立てしやべりける。岩代多喜太奥より立出で、「ナント亭主、踊の拵へ諸事萬端、手つがひはよいか。大かた殿のお成りに間もあるまい、藝者太鼓を大門口まで迎ひにやりやれ」「ハイ〜〜、そこに如才は〜〜ござりませ

ぬ、モウとうに御迎ひに遣しました、頓てお出でござりませう。ドレ私は勝手へ参り、御肴の指圖して置ませう」と、肩から爪の長廊下、すべりちらして走り行く。引違へて赤星運八、嚴つがましく入來り、「コレハく、岩代氏、萬事御苦勞に存じます」
 「チ、運八殿、今日のお役目御苦勞々々、シテ放埒之助はまだ参られませぬか」「サレバく、大門口の茶屋で、彼傾城瀬川といちやくちやく。餘り埒が明きませぬから、身どもは先へ参りました」「チ、それこそ究竟、チト其元に申談する子細あれど、爰は端近、萬事は奥にて」「左様々々」と打うなづき、奥の一間へ入りにけり。ウタ誰も知るまい二人が中は、筆と硯が知るばかり。數多の藝妓に圍まれて、大内之助義興は、色と酒とに亂れ足、千鳥が崎の屋舖より、けふも廓の色通ひ、現たわひもなり振も、夫と多喜太は立出でて、「コレハしたり我君、明暮アノ掛物の繪の如く、引付けてござりながら、大門口のお契りは、餘り御念が入り過ぎました」と、いふに義興につこと笑ひ、「エ、不粹なここというなく。それは格別、聞けば國元から來た新參の田舎者、身に目見えを願ふ由、豫ての趣向の通り、踊最中へ呼出し、場うてをさすが一興。ナ、用意がよくば踊を始めい〜」「ハ、ア、畏り奉る。しかし一家中の内より抽んで來る程の駒澤、もし御諫言申す時は」「ア、又しても諫めくと、此仙境へ通ひ初めては、釋迦如來が五百羅漢連れて來て

意見しても、けもない事〜」「サ所を諫る臨機應變」「ア、くどい〜、命のかけがへが二三十あらば知らぬ事、慮外申さば、コリヤ五郎正宗」「ハ、ア天晴大丈夫。其お心を見る上は、太夫どの始め拙者めまで安堵仕りました」「イヤコリヤ岩代、行燈より燭臺をくわつと點させ、踊を始め、駒澤めを呼出せ」「ハ、ア委細承知奉る。ソレ女子ども、早く踊を始めさせい。家來衆は駒澤を呼出し召され」と、いふに心得花車仲居、酒宴の設けとりぐに、既に踊を始めける。ウタヤア面白の四季の眺や。春は上野の花盛り、雲にかけらふ兩國の、涼の花火星下り。秋は賑ふ御殿山、山王堤に降積る、雪の景色も面白や。音頭を囃す三味太鼓、手振揃への花がさや、かざす姿の花紅葉、お召によつて阿曾次郎、今は駒澤次郎左衛門と、名も改る曠小袖、おめす臆せず入來れば、豫て指圖を受けたる踊子、右よ左とさよゆるを、寄らずさはらずよけ通す。夫と尻目には代多喜太、「駒澤殿、御前なるぞ、扣へさつしやえ」「ハ、はつ」と飛びしさり、故實を正し平伏す。大内之助はもつれ舌、「駒澤了庵が跡目、次郎左衛門とはお手前な」「ハ、ア御意の如く駒澤治郎左衛門め、初めて御機嫌麗しき御尊顔を拜し奉り、大慶至極に存じ奉ります」と相述ぶる。「ム、顔を上げい」「ハ、ハア」「チ、田舎者にはよい男ぢや。ヤイ儕此度参りしは、予が遊興を諫言の爲か」「ア、イヤ全く以て」「然らば又何の爲」「ハ、ア恐れながら

申上げ奉る。此度伯父了庵病氣に付き、拙者に家名を譲り跡目のお願ひ、後室様の御免は蒙りながら、未殿様へ御目見え仕らねば、家老中へ願ひを上げ、是まで推参仕つてござります」アアコレく、駒澤殿、鼠取る猫爪隠すと、詞を餌に殿へ取入り、古手な術の諫言申さうといふ下心で御座有らうがや」「コハ迷惑なる御疑ひ、拙者め片田舎に生育ち、遊所とやら廓とやら、終に見たこともござらねば、一つには御目見えの御願ひ、又二つには暫時なりとも、君のお傍に相詰め、御酒のお間でも仕らば、生涯の本望と、お伺りも願ひす此の仕合。岩代殿何卒よきに御取なし、偏に頼み奉る」「ヤ、コリヤ面白い。見事御身がお傍に相詰め、アノ御酒のお間をするぢやまで」「イヤモ不調法ながら」と、案に相違の受答、工合違ひに岩代は、鞞れて詞なかりけり。大内之助は機嫌顔、「ホ、ういやつく。治郎左衛門盃くれう」「ハ、ハア」「アレく、皆さん聞かしやんしたか、又諫言とやらでこはいめ見るのかと思うたに、テモ粹なお方。衣紋付なら物ごしなら、どこやらのお方とは雪と墨。ドレわしがお酌せうかいな」「エ、コレ逢坂さんのまんがちな、あなたが酌は此蝶山」「ハ、ハ、ハ、コリヤ最早悟氣か。取置いてつけく」「アイアイ。サア申し駒澤さんとやら、一つ呑ましやんせいな」「ハ、ア然らば頂戴仕る」と、猶豫もなく大盃、たんぶと受けてすつと乾し、「ハアなかく、結構なる御酒、シテ此盃はいかと仕りませ

う」「チ見事ぢや、押よう」「ハ、ア、コハ有難き仕合」と、又引受けて呑みほす酒量。大内之助も興に入り、「テ扱氣味のよいやつ。馴染の爲其盃を多喜太へさせ」「畏り奉る。然らば失禮ながら岩代氏」「エ、めつさうなく。身どもは朝夕殿に付添ひ、榮耀榮花の酒びたし、餓鬼が水見た様に、此大盃では中々いけぬ」「ア、イエく、岩代様、殿さんの指圖、駒澤様のさしやんした盃呑ましやんせねば卑怯でござんせう」「チ、さうでござんす。サアく、太夫主の云はんすとほり、卑怯云はずとおまへも一つ呑ましやんせ」と、無理につがれて顔しかめ、「エ、胴欲な者ども」と、つぶやきながら一口二口、「フルくく、中々むいきには呑まれぬはい」「ハハ、ハレ、口に似合はぬ弱いやつ。ヤイ駒澤、岩代が呑みかねを、何ぞ肴をして取らせ」「ハ、ア御意ではござりますれど、御前では餘り恐れ」「イヤく、苦しうない、サアく、所望ぢやくく」「ハア然らば御免」と立上り、扇をしやんと身の構へ。ウタ「テモ扱もわごりよは、踊子が見たいか、踊子が見たくば、北嵯峨へござれの。北嵯峨の踊は、對の烏帽子をしやんと著て、踊るふりが面白い。吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たいものよ。諸所お参りやつて、夙う下向召されと、かゝるちやか負うて参らしよ。ハ、ハ、ハ、尾籠の段は眞平御免下さりませう」「チ、中々出かすく。ナント太夫、よい酒の相手が出来たではないか。此上は奥座

敷でわつさりと呑直さう。駒澤も跡からこい」と、いふもしどろに立ち給ふ。岩代は佛頂面、「イヤ武藝の外は心がけぬ身ども、以後は舞でも稽古して、太鼓持の仲間入を致さう」と、何がなあたる悪體口。瀬川はそれと目配せに、新造禿は義興公、手引き袖引き奥の間へ、打連れてこそ入りにけり。照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、月に榮ある庭櫻、そよ吹く風に誘はると、花の吹雪を打興じ、詠め入つたる駒澤が、目元ちらつく醉心。こなたも同じ酒機嫌、所體崩して傍に寄り、「イヤ申し駒澤様、助様の無理じひで、お前も定めし酔はしやんしたであらうな。マア酔覺しに一ぶく」と、煙管にちよつと吸ひつけ煙草、是も勤の愛想かや。「コレハくゝ忝い。當時全盛の君様が、お志の此煙草、イヤモ祿知行にも勝つた賜、取りあへず賞翫致す」と、押戴けば、「ホ、人術ながらした云ひ様。かねてお前は此里へ、忍びくゝに通はしやんして、多くの女郎衆に詩文の指南。助様へは沙汰なしに、私も拙い文章の、添削受けしこなさんが、初めてけふのお目見え。知らぬ顔はして居れど、日頃短氣なアノ殿様、ひよつと荒氣は出まいかと、心の内で幾瀬の案じ。されども物馴れたお前ゆる、酒ぶりやら舞の手で、それはきついお氣に入りやう。是からとても、お傍放れず、お顔見せて下さんせえ」「コレハくゝ御深切忝い。イヤモ萬事不骨の田舎者、お引廻しを頼み入る。ガそれは格別、イヤナニ瀬川殿、

そもじは眞實殿様を大切に思ふ氣か、若し又外より根引せうとあれば、其方へ行く心か、所存の程が聞きたい」と、様子ありけな詞とは、思へどわざとそらさぬ顔、「チ、駒澤様とした事が、私が氣を知つて居て、いろくの探り言、殿様と私とは、初對面の其日から、水も洩さぬ二人が中、たとへ死んでも中々に、變る心はござんせぬはいな」「ホ、ヤあつぱれ貞女。其頼もしい心底を見込み、頼入れたき子細あり、何と頼まれては下さるまいか」「コレハ又改つたお詞、數ならぬ私なれど、身に叶うた事ならば」「アノ頼まれて下さるぢやまで」「チ、くど。さうしてお頼とはえ」「ホ、頼といふは外ならず」と、ずんと立つて床の間の、花生の櫻拔取つて、瀬川が前に差出し、「コレ此花は車返し、櫻の數も多き中、取分け人の賞翫するは、色香の妙なるばかりでなし、散らさば清き花の本性、譬へていはどそなたの姿。又アレアノ床の掛物は、定て聞きも及びつらん、唐土の立宗皇帝、御寵愛の楊貴妃と、沉香亭に引籠り、しめてからんで横笛の、音に聞えし二人が中、天に在らば比翼の鳥、地に在らば連理の枝と、契り合つたる睦言も、果は馬嵬が憂き別が中、つそのごとく此花も、千世も連理の榮をと、思ふにかひもあらしといふ、妨に逢ふ時は、枝に別れの落花微塵。アあつたら花を散らさうより、枝を分つて日陰に生けられ、仇に吹きくる風をば、よける思案が、サありさうなもの」「ム、そんなら連理の榮を捨て」「ホ、手打るとも人などが

めそ櫻花、けふばかりとぞ盛をも見め。サとつくりと思案して、車返しの其花を、散らすか咲かすか二つ一つ、マ色よい返事を待つてゐる」と、花に心をよそへ歌、詞残して駒澤は、一間へこそは入りにけり。瀬川は跡を見送つて、暫し詞もなかりしが、花打眺め獨り言、「心ありけな花の譬、アノ掛物になぞらへて、ちらさぬ様との詞のはし、手折るとも人などがめそ櫻花と古歌を引きしは、ハテどうがな」とばかりにて、散りくる花の雪よりも、解けぬ思に打傾き、思案に暮れし折からに、禿しをりが走り來て、「申しく、太夫様、助様がさつきにから、待ちかねてでござんす。早う座敷へ來なんせいな」「チ、嘸尋ねて居さんせう、ドレ行きやんしよ」とかい立てど、すまぬは胸の憂き思ひ、心は摸稜の手を引かれ、奥の座敷へ入りにけり。様子立聞く岩代多喜太、一間を出づればこなたにも、窺ひ出づる赤星運八、「岩代様」「シイ、聲高し運八。新參の駒澤め、てつきり諫言と思ひの外、踊狂うて俱に放埒、合點行かずと物陰より、窺ひ聞けば兼てより、此大磯へ入込み、瀬川とも馴染の様子、二人打寄りじやらりくらり、花の譬はどうやら氣ぶさい。いよく不義に極らば、こつちの爲には幸究竟、放埒之助に毒を吹込み、只一討にきやつが寂滅」「ム、成程々々、趣向の段取あつばれ妙計。ガ若し其手で行かぬ時は」「チ、其時は、コリヤかうく」と耳に口、「ム、スリヤ松が枝より、油斷を見濟しどつさ

りと」「コリヤ必ずぬかるな」「合點」と、嘯き領きひそくと、悪事に念を入れ智慧も、同じ穴なる狐武士、心おくの間奥庭へ、立別れてぞ忍び行く。一雙の臂は千人の枕と、賦せし詞の花に寝る、大内之助は熱酔の、胡蝶の夢や現なき。傍に瀬川は人知らぬ、心に思案ありそ海、深き思ひにかきくれて、寝られぬ儘にかたへなる、硯引寄せ細々と、書取る筆の歩みさへ、強からぬ文の男文字、うゝに引かへて、浮世の義理にからまるゝ、思ひは紙や知りぬらん。「しをりしをり」も忍び聲、アイと返事も長廊下、「おいらん何でござりんす」と、廊の訛も可愛らし。「ア、コレ大きな聲しやんな」と、云ひつゝ傍に氣を配り、何かひそくさよやけば、うなづき呑込む氣轉者、袖に隠して走り行く。望月の、影に引くてふ夫ならで、闇を便の駒澤は、道の枝折を先に立て、瀬川に忍び逢ふさかの、關の角戸を押開けて、差足拔足忍び來る。それと見るより正體なき、殿の寢息を窺ふ瀬川、そつと立退き駒澤に、さよやき渡す返事の文、いつの間にかは岩代が、一間の内に窺ふとも、二人はいざやしら紙の、封押切つて口の内、讀めぬそぶりと岩代多喜太、「ヤイ不義者見付けた動くな」と、言ひつゝ一間を断出づれば、二人は恠り大内之助、「不義者待て」と匆起きて、刀するりと瀬川が肩先、ばらりすんど切下けられ、アツとばかりに倒るゝ深手、見向もやらず短慮の義興、「駒澤覺悟」と切りかよるを、飛びしさつて

身をひれ伏し、「此次郎左衛門毛頭不義の覺候はず。たつた一言申上げたき一儀あり、先々々々先々、暫くお待ち下されう」「ヤア言うな駒澤、先刻より空寝入して窺へば、予が目を抜いて文の取やり。不義でないとは案外千萬」「ヲ、サ、此岩代が見るとも知らず、ほてくろしい不義密通。御手討は刀の穢れ、縛り上げて逆礫。ヤア、者ども、ソレ駒澤めを搦捕れ」「畏つた」と豫てより、木蔭に忍びの捕手の面々、十手打ふり駈來り、「腕を廻せ」とひしめいたり。ちつとも騒かずじろりと見やり、「ヤア仰々しい科人呼はり、ならば手柄に搦めて見よ」と、云ひつづ袴しほり上げ、待つ間もあらせず雙方より、小脇に組付く腕がらみ。「さしつたり」と振ほどき、右と左へづでんどう。續いてかゝる二番手が、打込む十手をかいくどり、ほぐれを付込む、瀧落し、庭へ散亂三番手、大勢一同に打込むを、四天拂にはらひ退け、秘術を盡す働に、取りひしがれてさしもの捕手、たじろく透を人礫、ばらりく、遙に投退け、「ヤア覺なき身を理不盡の御成敗、科極まらぬ其内は、めつたに繩はかより申さぬ」と、云はせも果てず岩代多喜太、「ヤアぬかしたり大盗人、不義の證據は是爰に」と、落ち散る一通差出せば、おつとり上げて義興公、開き見れども下らぬ漢文、「コハ、いかに」と判れ果て、暫し詞もなかりけり。手負は苦しき息をつぎ、「ナウ恥しや、假にも文のとりやりせしを、不義徒との御疑ひ、さ

らさら無理とは思はねど、勿體ないおまへを差置き、あだし心を持つやうな、此瀬川ではござりませぬ。コレとつくりと氣をしづめて、其文讀んで疑ひを、晴してたべ」といふ聲も、深手によわる息つかひ。岩代はせよら笑ひ、「ハ、ハ、ハ、工んだり拵へたり、ちんぶんかんの隠し詞、角字で紛らす手もある事。ヤア、お側付の儒者淺井順藏、此文體讀上げられよ。早く、」と呼はる聲、ハツと答へて一間より、立出づる淺井順藏、件の文を取つて逐一に讀下し、「ム、スリヤ是唐土の楊貴妃が、馬嵬が原にて玄宗帝に別れたる、最期の故事をつどりし文音、不義の詞は曾てなし」と、聞いて驚く大内之助、「ム、シテ其子細は何とく」「ハアイヤ、恐れながら其申譯は駒澤めが仕らん」と、おめる色なく座に直り、某伯父の頼に依つて、國元へ下りし處、養父了庵我を招き、主君義興公、鎌倉にて御身持甚だ放埒、御諫言申す者は誰彼分たす即座の御手討、是皆國家を望む佞人のなす業、先達て藥王樹をかたり取られ、剩さへ靈府の尊像紛失、等閑ならぬお家の大事、汝、我名跡を受繼ぎ、鎌倉へ立越え、いかにもして我君に御諫言申し奉り、御本心になし參らせよと、くれぐれの頼みゆるゑ、ハ、ア委細心得候と、夜を日に繼いで當地へ參著仕れども、佞人讒者の妨にて、御目通りも相叶はず。夫故忍んで廓へ立入り、詩文の流行、ヤ是幸と添削に事よせ、瀬川殿に對面し、心底をためし、先刻床の間の掛物と、車返し

の櫻を以て、歌になぞらへ無體の戀慕、心は命を所望の謎。それと悟つて禿を手引、忍ぶ此身は、ハ、ア勿體なや、假にも主君の思人に、不義と見せしも國家の爲、逢はど其儘差殺し、返す刀に切腹と、思ふに違ふ此文章。其身を捨てしは楊貴妃が、馬嵬が原にて最期の心、君の興を本國へ、車返しは國家の治り。ヤモ驚き入つたる秀作名文、遊女に稀なる心の操、君のお爲わざと御手にかよりしは、譜代の臣が戦場の御馬先の討死より、遙に増る健氣の覺悟。ホ、出かされたり」と感賞の、水を流せる辯舌は、實類ひなき忠臣なり。聞いて手負は起直り、「ア、嬉しや本望や。申し殿様、疑ひ晴して未來は夫婦と只一言、いうて聞かして下さんせ」と、合す兩手に血の涙。義興公も不便さに、後悔涙の聲くもらせ、「ハ、ア我ながら誤つたり、駒澤といひお事まで、放埒情弱の義興を、大切に思ひ一命を投げうつての志、コリヤ嬉しいぞよ、過分なぞよ。其貞心を露程も、夫と知りなば討つまじきに。未來は一蓮托生」と、悔み給へば手負の瀬川、聞くに嬉しさを合し、「エ、有りがたや 忝や、其お詞が未來の土産、嬉しう成佛致します。お前は目出たう國元へ、車返しの櫻花、榮え給ふを冥途から、見るが此身の本望ぞや。とはいふもののお名残をしや、そも逢初めし其日より、比翼の床のさよめ言、連理とかはす睦言に、千代もかはるな變らじと、誓ひしこともあだし世の、義理ゆるはかない此最期、娑婆と

冥途へ別れては、玉の簪を幻に、ことづてやらん傳もなく、嘸や輪廻に迷ひましょ。名残をしや」とはひ寄つて、覺悟極めし心にも、遺女の愛著心、見上げ見おろす暇乞、あへなく息はたえにけり。義興公も今更に、不便の涙たちかか、こらへかねてはらくく、漲る瀧津駒澤も、主君の心思ひやり、胸に満ちくる涙、袖に淵なすばかりなり。多喜太もどうやら底氣味悪く、此場黒める間に合詞、「殿、御本心に立ちかへり給ふ上は、我々までも大慶至極、此様子を帶刀殿へ相達し、俱に安堵をさせ申さん」と、詞巧みに云ひくろめ、やしきをさして立歸る。涙拂うて大内之助、一ヤアく、駒澤、我國の主として、愚にも酒色にふけり、詩文の道に暗かりしは、他門の嘲り家名の恥辱、今より心改めて、汝を師範に儒學をはけみ、主従心一致して、寶の盜賊尋出し、誅をせんないかにく、「ハ、ア、ハ、ハ、ハ、コハ潔き御一言、某君を守護するならば、國家に仇する佞人ばら、瞬く内に詮議して、二つの寶奪返し、成敗せんは手裏に在り。手始はまづ斯う」と、云ふより早く小柄の手裏劍、ねらひは松が枝どつさり、落つる運八拔討に、肩先ばらり大袈裟切。「ホ、あつばれ手の内、見事々々」早御歸館と供ぶれの、聲に隨ひ數多の同勢、廣庭狭しと居竝んだり。「イザ御立」と駒澤が、進める詞に義興公、立出で給ふ御目にも、涙の玉やみつ瀬川、流れの里の泡とのみ、消えし命は色即是空、花の姿も仇

嵐、散りゆく死出の山櫻、名残は跡に残れども、互に恥る主従が、心に數珠の車返し、花は櫻木武士の、道の道こそ三重かんばしき。

小瀬川の段

冬の夜の、月は老女の粧ひてふ、譬も凄き小瀬川の、入江の柳春待ちて、眉作れど彌寒き、風の手櫛にすきかへし、白粉ならで置く霜の、色もきらめく汀の岩、打寄る浪も氷居て、氷柱に下るばかりなり。在所親仁のほかくと、月夜に外聞構はんばう、挑灯提けて繋ぎたる、渡海の船に打向ひ、「オ、イ五郎太船の婆様、今夜もどうぞ病人に、お守りを戴かしに來て下され、迎ひに來た」とぞわめきけり。斯くと聞きてや歩を渡し、船を出づるも杖突き乃、のりかひ著物綿帽子、漸に陸に上り、「チ、昨夜往た木村の衆か、まだ病人は本復さしやれぬか」「さればいの、タベ御守を戴かして下さつたので、よつ程驗が見えました。どうぞも一度戴かして下され」と、云ふに老女は、「チ、安いことく。こなたの娘に限らず、若い女子の病氣なら、戴かして進ぜう」「モ、マア佛氣な婆様、禮には小麥團子の雑炊、汗の出る程振舞ひませう。イヤコレ婆様、怪我さしやるな」と追従口、足元照す挑灯より、月夜に光る茶瓶天窓、打連れてこそ急ぎ

行く。跡へうろく二人の悪者、そこよこよと尋來て、「ヤイ權よ、爰にも幻妻はをらぬぞよ」と、いへば權七、「ハテめんような、慥に此道へうせた筈ぢやに、姿の見えぬは、ハテナア、どうでも此柳の様子では、幽靈であつたも知れぬぞよ」「エ、うそ氣味の悪いこといふない。どこの世界に紫縮緬の振袖著て、足のある幽靈があるものかい。一體おのれが間拔から、折角見付けた鳥を取逃したはい。アノこよな大ならずめ」「何ぢや、ならずぢや。儂こそどうあはうの間拔ぢやはい」「エ、ほんくぬかしやモウやけぢや」と、つかみかよれば我武者もの、組んづころんづ揉合ひしが、「いつそばらしてこまさう」と、腰なる刀に手をかくれば、「イヤこいつは面白いはい。ハ、ハ、ハ、コリヤ汝がどす開く間、此手がじつとして居よかい。あんたらくさい、其頬けたを」と大だらを、抜けばこなたも抜合し、立向ひしが月影に、きらめく刃の尖さに、互にためらひ跡じさり、「ヤイくマア待て、マアまで。汝とおれが此所で切合つたら、どつちが死ぬるか知らねども、跡に残つた噂や坊主めが、けふは戻るか翌は戻るかと、待ちぼうけになりをるである。何と互に様子を書残して、其上で勝負せうかい」「チ、コリヤよう氣が付いた。しかしわりや紙や筆があるかい」「なうてかいく、紙も矢立も爰に有るはい。ガ待てよ、始を何と書いた物で有らう」「ハテ知れたこと、覺一つと書けやい」「エ、何ぬかすぞい。

夫では受取のやうなはい」「そんなら待てよ、かうつと、一筆示しり。イヤそれでは姫の状見
たやうなとぬかすであらう。オットあるぞく、一筆啓上仕候」「エ、それでは年頭状のやう
なはい」「そんなら待てよ。チ、思ひ出した、まづ書置の事」「ム、成程えいは。其次は」「エ、
我等事、我等事、此度商賣の人買出入に付き、切合うててこね申候。是まで人の物をいがみ候
へば、どうで地獄へまかり申すべく候。どうぞ佛の手下になられるやう問弔ひ頼入申候。死ぬる
此身は構はず候へども、跡々の飯米のこと氣にかより申し候。南無あみだぶく。何と哀れに
よう出来たではないか」と、云ふに勘太が涙ぐみ、「ア、よう出来たが、成程われがいふ通り、
死んだ跡ではかよや娘がひだるい目してほえるかと思や、おりや、おりや、いぢらしう成つて來
た」と、聞いて權七泣出し、「チ、おれが噂は惣嫁を引かして間のないに、此書置を見をつたら、
又しやりに出にやならぬかと、ほえるであると思へば、おりや命が惜しうなつて來た」「チ、
おれも死にとむない」おれもくくと雙方が、酸漿程の荒涙、はらり、エ、はらくく、しや
くり上げしは正眞の、鬼の目からの涙なり。「ナント勘太よ、おりやどうも死にともない。どう
ぞ助かりたいものぢやが、オ、有るく」「ム、有るとは」「サレバイヤイ、汝と中直りさへす
りや死ななくても大事ないぢやないかい」「チ、ほんにさうぢやはい。そんならもう中よしと成つ

て、此邊を最一遍尋ねうか」「チ、さうぢやく。こんなよい智慧が初手から出たら、書置ま
でして泣くまいもの。下司の智慧は跡先に氣を配れよ」とうろく眼、風に騒げる磯際の、あ
しに任せて兩人は、左右へこそは尋ね行く。山鳥の、初尾の鏡影ふれて、見ぬ戀人と一すぢ
に、こがれくして身に積る、深雪はやしきをしのび出で、心急げど行きなやみ、石につまづき
打倒れ、暫しは起きも得ざりしが、やうく起上り、「ア、嬉しや、今の悪者の油断の間に、
是まで逃けて來たれども、生きながらへては恥の恥、とても此の身はなき者と、死ぬる覺悟は
しながらも、心がかりは母様の、事を分けての御意見を、聞分けぬのみならず、死ぬる私か不
孝の罪、逆様ながら一遍の、御回向頼み上げます。又二つには乳母淺香、嘸や夢にも現にも、
尋迷うて歎くである。死ぬる此身はいとはねど、跡の歎きを見る様な、ゆるしてたべ」と詫涙の
「又戀しいは阿曾次郎様、此世の縁は薄くとも、未來は添うて下さんせ」と、さすがあどなき
娘氣に、親を思ひ夫をこひ、わつと泣く音に小夜千鳥、いと哀を添へにける。風に音する古
木の柳、きつと見上げて打點頭き、涙ながらにかよへ帶、結ぶかひなき惡縁と、恨ながらにと
くとも、枝に打ちかけ死ぬ覺悟、「なむあみだ佛」と聲もろ共、既にかうよと見えたる折から、
戻りかよりし以前の老女、それと見るよりかけ寄つて、「コレ待つた、待たしやんせ」と、抱止

められて深雪は悲しく、「イエ〜放して、殺して」と、あせるを猶も押し止め、「見れば若い女中のかちはだし、男故の駈落ちやの。夫なれば荅の花をちらさうより、命さへ有るならば、戀しい人に逢はれまいものでもない」と、なだむる詞に涙ながら、「ヲ、よういうて下さんした。さりながら、やしきを抜けて出でながら、ふがひない女の身、所詮添はれぬ縁なれば、どうぞ死なして下さりませ」と、又立上るをしつかと抱止め、「ソリヤ悪い了簡。カウわしが止めるからは、こなたのしたふ戀人を、尋ねさがして逢はして進ぜう」と、いふに嬉しく、「エ、そんなら戀しいお人をば、尋ねて逢はして下さんすか。エ、嬉しうござんす、忝い」と、死ぬる覺悟も今更に、色に引かるゝ戀慕の闇、心迷ふぞ道理なる。かよる所へ以前の悪者、たづね戻つてうそ〜きよろ〜蚤取眼、深雪の顔差覗き、「ヤア爰にをつたか、一遍と捜さしをつた。こつちへうせう」と手を取れば、老女は突退け深雪を圍ひ、「コリヤ此女中を何とするのぢや。女中こちへ」と手を取つて、行くを押し止め立塞り、「どこへ〜、其幻妻はおいらの網にかよつた鳥、脇目ふる間に逃けさらした。こつちへおこせ」と掴み付く、二人が腕首ぐつとしめ、はずみを打つて投付けられ、胸りしながら我武者もの、起上りて立ちかよる、勘太が頼へびつしやりと、當る小判の一包。「アイタ、〜、どえらい目にあはしやがつた」と、云ひつゝ取上げ、「ヤ

アコリヤ金」と、いふに權七手に取つて、「ム、コリヤ小判で十兩ばかり。エ、負けてこませ」と分口し、元來し道へ立歸る。老女は跡を打見やり、「テモ悪い者ども。シタガ十兩には安い物」「エ、」「イヤサ此間に早う」と手を引いて、袂より出す呼子の笛、ふつと一息吹きならせば、合圖と見えて元船より、苦押上げて掛けたる歩、深雪を伴ひ乗移れば、直に歩をてつ取り早く、碇引上げもやひを解き、權押取つて沖中へ、半段ばかり漕出す。折から砂道韋駄天走、宙をかけつてせきに關助、斯くと見るより聲をかけ、「オ、イ〜其船待つた、待てやい」と呼べど叫へど聞かぬ振、窓より差出す深雪が顔、「ヤア娘様か」關助かと、云はんとするを引戻し、障子ぴつしやり跡しら浪。陸にはあせる關助の、後へぬつと權七勘太、折角かよつたよい鳥は、手ごはい婆めに上げられる、せめて儕がわんほうを引剥いで腹いせ」と、取つてかよるを引ばつし、「イヤ面倒な」と拔打に、眞向なしわり拜討、倒ると死骸に目もかけず、心は彌猛いそ傳ひ、跡をしたうて追うて行く。

摩耶が嶽の段

雲霧とたな引きし、摩耶が嶽とて津の國と、播磨にまたがる高山あり。峯高うして雲に沖り、

谷深うして奈落に通ず。苔滑かなる岨道の、巖は鑿に削るが如く、常に馴れたる山賤も、足踏迷ふ嶮岨なり。かよる深山の懐に、自然なる岩窟も、いつか住家となし初めて、住馴したる岩疊、岩の屏風に這ひからむ、蔦の紅葉はさながらに、晝きなしたる如くにて、しをらしくも又物凄し。此家の主荒妙は、老の手業の手もたゆく、賤がうみ苧も鬢の、白髪に紛ふ雪の朝、椿山茶花折持ちて、娘千里は立歸り、「申しかゝ様、けふは爺様の祥月命日ぢやと云はしやんした故、谷陰で折つて來たコレ此花、御前様へ備へて下さんせ」といふに老女は打點き、「チ、それはよう氣が付いた。おれが插さうより、そなたの手向が佛へ御馳走、佛壇へ立てておぢや」「アイく、合點でござんす。シタガ申しかゝ様、アノマア浮洲はまだ戻らぬかいな」「チ、皆の者と夜山にいたが、まだ戻りをらぬ」「エ、テモ遅いことではある。此雪では冷えるであらう、早う戻りはしやらいで」「ム、そなたは何で浮洲の遅いを案じるぞ」と、咎められて氣轉の笑ひ、「ホ、、、アノマアかゝ様としたことが、色々の詞答、召遣ひの人ぢやもの、ちつとは案じも仕ませうかいな。それはさうと、いつやら連れて戻らしやんした女中は、どこへ行かしやんしたえ」「エ、娘としたことが、様々の根問葉問、其女中は此間、播州邊のよい衆の所へ奉公にやつたのぢやはいの」「それはマアいといし事、人も通はぬ此山中、遣ふ者としては荒

こましい男ばかり、折々は若い女子がくるけれど、いつの間やら皆奉公。分けて此間の女中は媚も心もしをらしさうな人、よい咄し連と思つたに、是も又奉公とや。それならさうと暇乞でもして往たがよいに、聞えぬ人や」と恨言、女同士としてしをらしき。老女は聞くもうるさけに、「エ、かけも構はぬ他人の事、ぐどく」と云はずと、早う花を手向ておぢや」と、苦い顔付氣の毒と、千里は花を携へて、佛間をさして入りにけり。折しも雪道踏分けて、立歸つたる三人連、縛り上げたる里の子に、泣音を止める猿轡、或は衣類旅荷物、銘々かたけて内に入り、「ヤア頭、精が出ますの」「チ皆戻つたか、チト獵が利いたか」と、いふにかんまち猿迂、繩がらみ投出し、「イヤモ昨日からの大雪で、人通りはとんとなく、やうくと向ふの村からうせをる奴、ヤこいつよい仕事と、稻叢蔭からオ、イくと呼んだら、サアふるひ出しくさる。しめたと思ひ引捕へたら、八十位の老耄め、引剥だ布子下著、帯は小倉の花色縞、まんざらでもなき」と、自慢らしげに投出す。次は山蛭洞八が、十二三な小女郎を突出し、「おれが帳場も人通りがなうて、どうやらこのがき一疋、豆腐買ひにうせたのを、引とらへて顔見れば、小しをらしい頬付ゆるゑ、引かたけて戻つた」と、語れば老女は苦笑ひ、「エ、埒の明かぬつまみ錢。シタガコリヤ浮洲、われが仕事はどうぢやいやい」「イヤモ新米のこの浮洲、どうぞ頭の氣に入る

様なよい仕事と思へども、扱大雪でよい鳥もかゝらず、やうく山伏めを引剥いた兜巾襦袢懸數珠輪袈裟、夫から夜更けて長崎飛脚、迹足早う迹けをるを、追かけて引たくつた荷物の内には、人參が十四五兩、珊瑚樹が十二三、金が一步で十五兩、跡はござくがらくた物、帳合を頼みます」と、一々縁に竝ぶれば、老女はそれく帳に付け、「チ、出来たく。エ、猿も山蛭も嗜めく。新まいの浮洲に花を取られるは、心がけが悪いからぢや。シタガ仕事はまん物、マア酒でも呑んで、晝の内は休めく。」「オット合點ぢや。」「マ、コリヤ又聲が高いわい。常からも云ふ通り、氣の叶はぬ娘ゆる、追剥の人買のと聞いたたら、蟲が出るによつて、獵師商賣というて有る程に、わいらも随分知らさぬやう、其ちつべいもいつもの鳥屋へほり込んでおけ。」「オット合點夜通しに、ふるひ上つて陰囊を、猪雞炊焚き熱燭でも」情も知らぬ牛頭馬頭ども、泣入る小娘引立てて、勝手へこそは入りにけり。岩が根の、雪より忠義に凝つたる關助、深雪が行方爰かしこ、尋ねさまよひ思はずも、此岩窟に尋來て、斯くと見るより内に入り、「率爾ながら此家の内へ、年の頃は十五六で、やさしき方の娘御は、もし進退うて見えませなんだか」と、云ふに老女は心の合紋、扱は由緒の者なるかと、思へど態とさあらぬ顔、「イエく、そんな女中は見受けませぬ。ガそれを何ゆる尋ねさつしやる。」「さればさ、拙者は藝州福岡の者、子細あつて主人

の息女、若氣の至りにやしきを出で、其又翌日小瀬川で、ちらと見た船の内、呼べど叫べど届かぬ追風、モかいくれに見失ひ、それより陸を方々と尋ぬるに、此籠の里人に問うたれば、エ、丁度其格好の娘を六十有餘の老女が連れて、此山中へ登しとの事故お尋ね申す。シテ此家より外に家でもござるかな。」「チ、有るともく、アノ坂を左へ取り、十四五丁行けば獵師の家が有る、そこへ往て尋ねさつしやれ。」「ソレハ近頃忝い。氣急にござればもうお暇」と、たばかり工もしら雪の、道踏分けて尋ね行く。始終小陰に窺ふ手下、指足して、「コレお頭、今の奴が口ぶりは、どうやら先度の仕事を。」「チ眼付けをつた様子、しかし家の無い山中へやつたれば、まひ戻つてうせるは定、足が付いては面倒な、コリヤわいら追付いて谷へばつさり。」「チ、呑込んだ」と猿、山蛭も共關助が、足跡したひ追うて行く。引違へて出来る武士、門口に立止り、「荒妙殿在宿か」と、云ひつゝはひれば老女は不審、「ム、つひに見馴れぬお侍様、何方からの御越は。何はともあれマアく是へ」と請すれば、會釋もなく上座へ通り、「イヤ身どもは蘆柄傳藏とて、山岡立蕃殿に一味の者、則立蕃より密事の使者、委細の儀は書面に」と、取出し渡せば老女は受取り、「チ、是はマアく遠方の處、殊に難所の山坂を、御苦勞様や」と、云ひつゝ手紙取出し、封押切つて口の内、何か心に打點き、「ム、そんならお前も立蕃様と。」「チ、

サ疾くより合體。身どもは藝州岸戸家の家中、豫て立蕃殿と心を合し謀反の密談、然るに駒澤了庵が養子治郎左衛門と云ふやつ鎌倉表へ参り、放埒の大内之助を本心に立歸らせし猿智慧、此奴いかなる術を以て薬王樹を奪返さんと計るまじきにあらず、萬事に心を配らわよとの傳言「ヲ、成程此密書にも其事、ちつとも油断は致しませぬと、憚りながら山岡様へ」「ヲ、サ、心得申した。ガ身どもは外に所用も有れば、最早暇申さう」「それは餘りおせはしい、何はなくとも御酒一献」「ア、イヤ、又重ねて」と立上り、出るを見送る互の目禮、老女は一間へ蘆がらも、一足三足立出でしが、何思ひけん小戻りし、内を窺ひ小點き、奥庭さして忍び行く。

摩耶が嶽の段 三段目の切

冬ざれば人目も草も、枯果てて、残るも淋しき軒の松、枝吹きならず雪嵐、いとど寒氣ぞまさりける。納戸を出づる浮洲の仁三、寒さ凌ぎとるりのそば、櫓打くべて御垣守、衛士にはあらぬ焚火より、戀ゆるもゆる胸の火の、晝も消えざる物思ひ、娘千里は母親に、心おくより忍び出で、「オ、仁三郎いつ戻りやつた。昨夜はきつい大雪で、内に居てさへ寝ぐるしさ。モウわしやそなたのことを、案じてばかり居たはいな」と、詞をしほに寄添へば、色をふくみし雪の

梅、山の奥さへ浮世なれ。「ヲ、千里様、それはよう案じて下さりましたなう。ガこゝへ来て新米の此私を、しなつこらしう云うて下さりますので、蔭ながら悦んで居りますはいな。しかし夜持く爰の商賣、雨降る晩や雪の夜でなければ、コレよい鳥はかよりませぬぞえ」「ム、アノ、夜さりでも鳥を取るのかや」「エ、お前も素人の娘か何ぞのやうに。コレ鳥といふはナ、人、アアイヤやつぱり取りぢや。ハ、ハ、ハ、何がその鳥めが、雨や雪が降ると、聲山立てて人を呼んでも、イヤサ人を見ても、よう働かせぬので、モ取りよいといふこと」と聞いて千里は打しをれ、「いかに世渡るたつきとて、寢鳥を取るはきつい罪、もう是からはそんなこと、止めてほし」と入譯を、しら齒娘の氣も弱く、耳を押へてさしうつむく。「ハ、ハ、ハ、氣の弱い。何ほ其様にいやがらしやつても、寢鳥は愚猪狼より恐ろしい事をする。コレ掣様をとらねばならぬぞえ、マチつと嗜んだがよござります」と、いふ顔じつと打眺め、「エ、いやらしい、そんな事聞きたうない。私が好の殿御といふは、ナ、コレ仁三郎、日外かゝ様が連れて戻らしやんした女中様、アノ子を頼んで文の數、返事のないはそりや聞えぬ。モ今更いふも恥かしけれど、人里遠き此内へ、初めておぢやつた其時から、いとらしうてきつとして、明暮思ひ増すかどみ、紅白粉もどうぞして、そなたの心に可愛いと、思はれたさの化粧水、何といひ寄る詞さへ、灘

の鹽焼く下燃えに、こがれ暮して海士衣、なみだに筆の濡文も、戀のいろはの手習に、袖に付くてふ住吉の、神の御影の合す手も、嬉しい逢瀬を求塚、生田のもりのいくたびか、運ぶ心をちよつとでも、汲んでくれたがよいわいな」と、男の膝に取付いて、赤らむ顔は夕日照る、摩耶紅梅の色盛り、花も恥らふ風情なり。「イヤモ、見るかけもない者を、度々の心遣ひ、嬉しいけれど、お前は主なりわしは家來、いかに商賣がらちやとて、主の娘を盗む、イヤサ、主の娘御と忍び逢ふも異なるものと、あり様は遠慮して居ました。ガ、眞實思うて下さるなら、いかにもどうなとしませうが、コレ、お前に無心がある、ガ、何と聞いて下りますか」「アノわしが願さへ叶へたもるなら、モどんな事でも聞こはいなう」「ム、そんならアノ、かみ様が大事にしてるやしやる、女の病を治す守、そつと見せて下さりませぬか」「チ、夫は安い事なれど、アノお守は二重箱に入れて錠をおろし、錠はかゝ様が肌身放さず持つて居やしやんすれば、首尾を見合せ見せう程に、アノちよつと奥の間へ」「ハテさうぢやと云うて晝中に」「エ、マアコレ、ちよつとおぢやいの」と、無理に手をとる笹栗の、我から落ちて草の露、濡れに行く身ぞわりなけれ。折から坂道いつきせき、駕を昇せて輪拔吉兵衛、遠慮會釋もあらくれ者、雪踏みちらし門口より、婆様内にか、ちよつと逢ふ」と、わめけば納戸を立出づる、老女はあたり見廻して、それと見る

より落付顔、「チ、誰かと思へば輪拔殿、大きな聲で何事ぞ」「イヤ何事でもない、此中百兩で値を極めて預つて往んだ代物、宥めても賺しても、たごめろくとほえるばかり、勤奉公はいやぢやと胴張り、間がな透かな辻支度、イヤモ顔に似合はぬしふとい女郎ぢやはいの。入込の内に取込がしてはこつちの大損、事のないうち代物戻す」と、小腕取つて引出すは、世にあき月の娘の深雪、泣きはらしたる目の内に、溜る涙の玉の緒も、絶えず重る憂き思ひ、其儘庭に泣居たる。「エ、又してもく、いふ事聞かぬばいた女郎。コレ吉兵衛殿、折檻して又相談せう。代りには不足なれど、ゆうべ手まへた小女郎め、行口があるなら頼みます」と、庭の小屋より以前の小娘、細付の儘荒氣なく、引立て出して見せければ、輪拔じろじろ打眺め、「ム、年は往かねどまんざらでもない代物、相談は後にして、マア預つて往きましょう」と、駕へほり込み先に立ち、泣入る深雪を睨み付け、「むだ骨折したどう女郎」と、諷きく立歸る。跡に老女が尖り聲、「エ、何所へやつてもほり戻されるしふとい子やの。小瀬川で身を投げうとして、死ぬる命を助けた上、大まい拾兩といふ金まで入れ、けふまで養うた義理を忘れ、奉公いやがる思知らずめ。賤しう育たぬやつと思ひ、手ぬるうすれば付け上る、アノ爰な糟賣女めがうぬ。ア、コリヤもうそろくと痛い療治をせにやならぬはい

の」と、焼返つたる圍爐裏の鐵橋、片手に握つて目先へ突付け、「サア、艾いらすのいつ灸、其美しい顔へするるか」「サアソレハ」「頬がまちを突抜かうか」「ア、コレ申し、どうぞ御勘忍」「サアそれ程に悲しくば、丸山へ賣られて行け」と、云はれて深雪は涙聲、「ナウ丸山とやは聞及ぶ、唐土船の漆とやら。情なや唐國の人に肌身を汚さると、君傾城の憂き勤、是ばかりは御了簡」「ア、ム、そんなら日向へ奉公に」「ア、コレ申し日向とは、夫よりも遙に遠き日の本の、果と聞けば猶悲しい。どうぞ都へ只の奉公、水仕の勤もいとひはしませぬ。お情お慈悲」とばかりにて、只手を合せ泣き居たる。「ホ、、、エ、味い事いふわろぢやはいなう。水仕にやつてはコレ、金にならぬはいの。コレくくくよい子ぢや程に、アノ恩返しぢやと思つてナ、コレ此婆にまうけさして下されいの」「サアそれは」「但し此鐵橋が喰ひたいか」「ア、コレ申し」「いやかいやか」「何のくく、何のいやと申しませうくくく」「サア賣られて行くか」「サアそれは」「サアアアア、いやなら殺すがどうぢややい」「ハア、」「サア返答せい女郎め」と、罵る聲は嚙付く如く、肝にこたへて此世から、奈落に沈む憂き思ひ、悲しさ怖さ恐ろしさ、涙は胸にみちのくの安達原の黒塚に、籠れる鬼の呵責にも、まさる責苦に堪へかねて、逆行く衿髪引戻し、邪見の老の皺腕に、引ずり廻し責せつちやう、見かねて千里は走り出で、「エ、コレかゝ様、餘りぢやくく、餘りぢやはいの。いとほなけに此女中を、情らしう助けたの、イヤ命の親のと言はしやんしても、君傾城に賣らうとは、よう胴欲に言はれた事。賣らいでならぬ事なれば、かはりに私を賣つてたべ」と、縋り止めるをふり放し、「コレ娘、エ、そなたの知つた事ぢやない、そつちへ退いていやく」「ア、イヤく、何ほつても此子を賣らさぬ、わしをく」と争ふを、「エ、面倒な」と突退けて、かよわき深雪をちやくく、焼鐵橋の續打、アット一聲反返り、其儘庭へ倒れ伏す」「ナウいとしゃ」と泣入る千里、老女も今更詮方も、鞆れ果てたる折こそあれ、麓の方より手下の眼太、息を切つて駈來り、「イヤコレくお頭、大名の金飛脚、此麓で追取巻き、まぶな仕事と仲間の者、汗水かけども手強い奴、どうやらこつちが覺束ない、早う加勢」と言捨てて、飛ぶが如くに引返す。聞くより老女は悔り仰天、「浮洲は居ぬか」といふ内も、老のいら立傍なる、心に覺えの一腰かい込み、裾ばせ折つて駈出づるを、「ナウ情なや」と止る娘、引退けく力足、麓をさして走り行く。跡に娘はうろくと、あなたこなたを氣遣ふ内、一間を出づる浮洲の仁三、千里は見るより、「チ、よい所へ仁三郎様、何やら事が起つたとて、かゝ様は今麓へ。ガ、マア差當つて此女中を、どうぞ助ける仕様はないかなア」「サアどうというて外に何にも。オ、ソレく、幸ひ頭の留守の間に、今の守をサアく、早う」「ア

りぢやくく、餘りぢやはいの。いとほなけに此女中を、情らしう助けたの、イヤ命の親のと言はしやんしても、君傾城に賣らうとは、よう胴欲に言はれた事。賣らいでならぬ事なれば、かはりに私を賣つてたべ」と、縋り止めるをふり放し、「コレ娘、エ、そなたの知つた事ぢやない、そつちへ退いていやく」「ア、イヤく、何ほつても此子を賣らさぬ、わしをく」と争ふを、「エ、面倒な」と突退けて、かよわき深雪をちやくく、焼鐵橋の續打、アット一聲反返り、其儘庭へ倒れ伏す」「ナウいとしゃ」と泣入る千里、老女も今更詮方も、鞆れ果てたる折こそあれ、麓の方より手下の眼太、息を切つて駈來り、「イヤコレくお頭、大名の金飛脚、此麓で追取巻き、まぶな仕事と仲間の者、汗水かけども手強い奴、どうやらこつちが覺束ない、早う加勢」と言捨てて、飛ぶが如くに引返す。聞くより老女は悔り仰天、「浮洲は居ぬか」といふ内も、老のいら立傍なる、心に覺えの一腰かい込み、裾ばせ折つて駈出づるを、「ナウ情なや」と止る娘、引退けく力足、麓をさして走り行く。跡に娘はうろくと、あなたこなたを氣遣ふ内、一間を出づる浮洲の仁三、千里は見るより、「チ、よい所へ仁三郎様、何やら事が起つたとて、かゝ様は今麓へ。ガ、マア差當つて此女中を、どうぞ助ける仕様はないかなア」「サアどうというて外に何にも。オ、ソレく、幸ひ頭の留守の間に、今の守をサアく、早う」「ア

「アイ合點」も女房顔、千里は納戸へかけり行く。浮洲は深雪を抱かよへ、胸撫でおろせば手に障る、守り袋の中改め、「ム、藝州岸戸の家中、秋月弓之助が娘深雪、ム、」と心に「思案手早に納める程もなく、娘は守の箱携へ、いそぐとして立出づる。「サウく、どうやらかうやら取つて来た、かゝ様の戻らしやんせぬ其中に、早うく」と手に渡せば、箱押取つて恭しく、深雪が額に押當つれば、守の奇特忽に、息吹返し邊を眺め、「ヤアおまへは娘御」「チ、氣が付いたかえ、ア、嬉しやく。コレ幸ひかゝ様は留守なれば、此間に早う行かしゃんせ」と、聞いて深雪は飛立つばかり、嬉し涙にくれ居たる。「コレく女中、此坂を左へ取れば御影へ出る近道、頭が戻らぬ其中に、サアちやつとく」に手を合せ、「忝うござんする、死んでも御恩は忘れじ」と、膝もわなく立ちかねて、漸遅れ落ちて行く。浮洲は守に目も放さず、何思ひけん在りあふ鐵橋、取るより早く守の箱、はつしと碎けば驚く千里、見向きもやらす錦の袋、中より出づる狀取上げ、「ム、扱こそく。山岡玄蕃の内通の密書、又此守こそ大内家の重寶藥王樹。扱は主の老女と云ふは、大友の殘黨、謀反人の同類よな」と、聞いて千里は、「何と云はんす、アノかゝ様を謀反人とはえ」「ホ、先年玉橋の局と偽り、大内家へ入込み藥王樹を銜取りしは此家の老女、縁につれたるお事なれば、妹背の縁も是限り」と、詞尖にいひ放し、一間の

内へ駈入つたり。娘は悲しさ「ハアはつ」と、其儘そこに泣倒れ、正體なみだの折からに、斯くとは知らず主の老女、心も足もいきせきと、我家の内へ駈戻り、破れたる箱を見て悔り、「ヤアコリヤく、娘、大切なる守の箱、何者が此仕業、サアく、子細はどうぢやく」と問詰められ、隠し持つたる懷劍を、咽にがはと突立てたり。老女は悔り其手に縋り、「コリヤく、娘、何故の此最期」と、抱きかよへて介抱に、娘は苦しき息を繼ぎ、「ナウかゝ様、堪忍して下さんせ。語るも便なき事ながら、戀の媒頼んだる、義理を思うて最前の、女中を助けんと、仁三郎様の指圖にまかせ、大事の守を取出し、戴かせば忽に息吹返す即座の奇特、幸ひ此場を落せしが、思ひも寄らず仁三郎様、守の箱を打碎き、中に添へたる狀を見て、情なやお前をば、謀反人の山岡とやらが同類とて、折角結んだ妹背の縁、切放されし其悲しさ。とても添はれぬ惡縁と、思ひ切つても切られぬ因果。かく成る事も大切な、寶を失ふばかりかは、大事を人に知らせたる、云譯なこの此最期」と、語るを聞いて老女荒妙、眼をいからし聲ふるはし、「ム、扱は浮洲の仁三といふは、古主の仇たる大内家の、廻し者であつたよな。それとも知らず氣を赦し、折角手に入る寶を奪はれ、現在娘を殺せしも、元の根ざしはアノ二才め。イデ搦殺して腹いん」と、身繕ひして荒々しく、一間の障子引明くれば、内にすつくと浮洲の仁三、以前の姿引

きかへて、進賢の冠羅綾の唐服、寶を守護して立つたるは、股をくぐりし韓信が、大元帥の位に著き、拜賀を請ぜし勢に、荒れし老女も氣を吝まれ、只茫然たるばかりなり。強氣の荒妙高笑ひ、「ム、くム、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤア納め過ぎたる汝が振舞、娘の敵寶の盜賊、サアくくく観念せよ」と詰寄れば、ちつとも動ぜずはつたとねめ付け、「ヤア盜賊とは案外なり、疾くより入込む某こそ、浮洲の仁三郎とは汝を計らん假の名、誠は大内家の隨臣駒澤次郎左衛門が弟、同苗三郎春次なり。我幼年の頃、父了庵に勘當請け、成人に隨ひ先非を悔いて大明國へ押渡り、彼地の醫官とまで成りしかども、日本に在す父の慕はしく、仕を辭して歸朝せしに、父は早病死の跡、思ひ合せば先頃、多々羅の濱で怪しき老女、慥に藥王樹の盜賊、住家は摩耶と聞きしゆゑ、大友の殘黨浮洲の仁三と偽り、此家へ入込み今日只今、紛失せし藥王樹を奪返せしも娘千里が志、つれなき我に操を立て、生害せし貞心義烈、謀反の餘類と云ひながら、過分至極」と落涙を、聞いて老女は物をも云はず、持つたる脇差腹にぐつと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、取付き歎く手負の顔、打眺め涙を浮め、「エ、是非もなき御運の末。誠御身は我子にあらで、御主君大友宗鎮様の忘形見、菊姫君でござるはいの」「エ、」「ナ、御合點の行かぬは御尤御尤。ア、思ひ出せば二昔、御父大友宗鎮様、足利の天下を掌握せんと、謀反の箴を上げ給ひ、討

手遅しと待つ所に、案に違はず大内義隆、手勢すぐつて三萬餘騎、豊前の國へ攻下り、小倉が城を取圍み、息をも繼がず揉立つる。味方も爰を破られじと、矢種惜まず指しつめ引きつめ、射出す矢先は雨あられ、篠を亂して降ることく、矢庭に城下は死骸の山、初度の軍は打勝ちしが、其後數度の合戦に、大將始め數多の軍兵、水の手切れて落城す。最期の際に宗鎮様、わらはを近く招き寄せ、其方何卒姫を伴ひ落延びて、命ながらへ守育て、成人の後は尼ともなし、父が菩提を弔はせよと、主命辭する所なく、漸城を落延て毒蛇の口をのがれしぞや。再び御世に出さん物と、海賊人買の惡業も、まさかの時の軍用金。又玉橋の局と偽り、藥王樹を奪取りしは、大内家を滅亡させ、二つには祈禱にことよせ、媚よき女を見置きては、手下に云付け拘引し、君傾城に賣渡せし、其罪科が報いくて、姫君の御身の仇と成つたるは、皆わらはがなせし業、赦してたべ」と取付いて、悔み歎けば菊姫は、いと涙にむせかへり、「ナウ自とも仇になしたる身の徒、そなたの最期も自ゆる。こらへてたも」とばかりにて、歎けば老女は猶せき上げ、「ナ、よう云うて下さつた、翌をも知らぬ老の身の、死ぬるは元より覺悟のまへ。それに引きかへ姫君の、戀ひこがれたる其人に、一日片時添はしもせず、盛りの花をむざくと、無常の風にちらすか」と、主従手に手を取りかはし、わつとばかりにむせ返れば、心を察し春次も、不便と見やる兩眼に、

たばしる涙はらくらく、ふり積む雪も一時に、解けて流れて谷川の、水も淵なす如くなり。
 斯る歎きもしら雪の、道を蹴立てて駈來る關助、庭先へ踊り入り、「ヤア我を欺き山路に迷は
 せ、討たんと謀りし狸婆、天罰報うてくたばつたか。深雪様を拘引し、何所へやつた。サア
 眞直に白状ひろけ、何とく」と詰寄れば、三郎聲かけ、「先待たれよ。我こそは駒澤了庵が二
 男三郎春次なり。とくより此家へ入込んで、始終の子細は皆聞いた。御邊が尋ぬる深雪といふ
 は、我兄次郎左衛門とかねて縁邊の契約あること、某豫て聞及ぶ。最前守に書付有つて、秋月
 が娘とは察したる故、此家の千里と云合せ、都をさして落せし」と、聞いて關助小踊し、「ハ、
 有り難しく、お禮は重ねて。心もせけば早お暇」と、かけ行く向ふへ蘆から傳藏飛んで出で、
 「ヤア聞いたく。浮洲の仁三と云ふは大内家の浪人。此通り山岡殿へ注進」と、逸足出して
 駈行くを、エ、イと打つたる小柄の手裏劍、たじろく所を關助付入り、抜く手も見せず幹竹割。
 「ホ、ホ、潔よし。山岡玄蕃が逆意の企とくより夫と知つたれども、紛失したる靈符尊
 像、奪返すまで荒立てがたし。此密書を匣にして、玄蕃を亡す我術。必ず堅固で、關助」と、勇立つ
 たる其有様、手負の老女は聲を上げ、「オ、あつぱれ。ガ、只痛はしきは菊姫様、最期に婆
 が一つの願ひ、此世の縁は薄くとも、未來を結ぶ夫婦の盃、聞届けて下され春次様」「ホ切なる

老女が願に任せ、盡未來まで滌らぬ夫婦、半座を分けて待たれよ」と、詞に嬉しく二人の手負、
 手を合したる悦び涙。「ホ、其媒は此關助」と、心を汲取りかいけ杓、是や末期の水盃、冥途
 の旅へ嫁入の、儀式をまねぶ三々九度、苦しき中にもにつこりと、笑顔は娑婆の色直し、雪の
 白髪の尉ならで、姥もあへなく介添の、彌陀の淨土へいぬ張子、血しほの紅に染めてやる、野
 邊の送火消えはてし、草葉の露の玉の輿、あはれはかなき契なり。

濱松の段

歌思ふこと、まよならぬこそ浮世とは、誰が古への詭言、今は我身の上以降る、涙の雨の晴間な
 く、哀れや深雪は数々の、憂さ重りて目かいさへ、泣潰したる盲目の、力と頼む物とは、わ
 づかに細き竹の杖、あるにかひなき玉の緒の、切れも果てざる三味の糸、露命をつなぐよすが
 にと、背に結はひ懸けしをくと、心の闇路たどりくる。跡に大勢里童、てん手に竹切振廻し、
 「アレ、朝顔の乞食目くら、叩け、打てよく」と取廻す。「ア、コレ、目の見えぬ
 者を其様にはせぬものぢやはいな。どれもよいお子様や、今度よい物が有つたら上げうぞ
 え」「エ、いやぢやはい。乞食に誰が物貰ふもんで、ナア次郎坊」「ヲ、さうぢやく、あたぎ

たない乞食の物貰ふものかい。そんな事ぬかしたら、コリヤかうぢや」と惣々が、竹で打つやら石打つやら、育も下司のわんぱくども、寄つて掛つてさいなまれ、「ア、コレく、モウ再び云やませぬ、こらへて下され誤つた」と、土にひれふし詫びければ、「チ、泣いて誤るなら堪忍してやる。サア皆こい、いつもの土手で芝居ごと、五郎よ、次郎よ」と呼連れて、道草しながら走り行く。跡に深雪はわつと泣き、「エ、浅ましや情なや、誰あらう岸戸の家老秋月弓之助が娘とも云はれし身が、いかに落ちぶれたればとて、筋目もない里の子に、乞食よ非人と打叩かれ、誤りましたは何事」と、身を抱しめてどうと伏し、詫涙ぞいぢらしき。願歌あら尊、導き給へ観音寺。遠き國よりはるくと、乳人浅香は浅からぬ、歎きも身にぞ笈摺の、深雪の行方尋ねんと、思ひ立つたる願禮も、辛苦憂き身のやつれ笠、露の舍も取りかねて、杖を力に歩み寄り、「コレく女中、率爾ながらチトお尋ね申したい」と、音なふ聲に泣顔隠し、「チ、コレハママどなた様かは存じませぬが、私は目界の見えぬ者、ガ、ママ何ごとのお尋ねぞ」と、云ふ物ごしのつまはづれ、どうやら尋ぬる其人に、似たと思へど形かたち、是は非人殊に盲目、心の迷ひと思ひ返し、「ホ、、、チ、わしとした事が麓相な、目界の見えぬお人に問ふ事は異な物なれど、若し此街道を年の頃は十六七、媚容人に勝れ、やしき育ちの大振袖、供をも連れず只一人、通

られし様子をば、もし聞きはなされぬか」と、いふに正しく我身の上と、胸騒ぎしが待て暫し、世の中に、似た聲の人似た事の、無きにあらずと思ひ返し、「チ、それはママ笑止な事や。往來も繁き此街道、女中の一人旅は幾人といふ限りなし。左様にお尋ねなされては、なかく知れう様もなし。ガ、ママ國はいづく、名は何と申しますえ」「サレバイノ、國は藝州福岡、名は深雪様」といふは彌乳母浅香、ヤレなつかしやと云ひたさも、落ちぶれ果てし今の身を、我と名乗るも面伏、殊にそれぞと云ふならば、連れていなれて父母に、どの顔さけてまみゆべき。罪深き事ながら、偽りすかして歸さんと、猶しも聲をくろまして、「チ、成程、たしかそんな噂も聞きたれど、其女中は國を出てより様々の憂目に逢ひ、漸のがれ此邊までは來られしが、どうしたことか四五日前に、淵川へ身を投けて、死なしやんしたと人の噂。假令どの様に尋ねても、もう逢ふ事はありませんまい」と、聞いて浅香は、「ヤアくく、何其女中は身を投けて」ハア、はつとばかりに身を打伏し、前後正體なき居たる。深雪も共に悲しさの、涙かくして傍に寄り、「コレ申し女中様、悲しいはお道理ながら、老少不定の世の習ひ、定りごとと諦めて、早う國へお歸りなされ、跡弔うてお上げなさるが佛の爲。海山かけし長の旅、随分怪我のないやうに」と、云ひつゝ立つてかけ小屋へ、さぐりくゝて入りあひの、鐘に哀を添へ

にける。跡に浅香はうつとりと、涙ながらの一人言、「エ、コレ申し、聞えませぬぞえ深雪様。家出なされしその時も、一言明して下さつたら、仕様もやうも有らうもの。ア、おいとしや奥様は、お前のことを苦に病んで、明けても暮れても泣いてばかり、果は重き病ひの床、死ぬる今はの際までも、どうぞ尋ねて連歸り、せめて位牌に無事な顔を、逢はしてくれよと私への遺言、夫故忌の明くをもまたず、國々廻る順禮も、おまへに逢はうばかりぢやに、なせ死んで下さんした。わしやお位牌へ云譯を、何とせうぞ」と身をもだえ、恨むる人は目のまへに、ありともしらぬくどき泣。聞くに深雪は身も世もあられず、袖をかみしめ耳をおさへ、泣聲立てじと喰ひしぱり、こらへくし苦しきは、骨も碎くるばかりにて、泣くよりも猶つらかりし。亂るゝ心押ししづめ、浅香は涙の顔を上げ、「ア、我ながら愚癡のいたり、いつまでいってもかへらぬ事、此上は菩提のため、打残りたる札所を廻り、早う國へ歸りませう。さうぢやさうぢや」と立上り、小屋の戸口にかけ寄つて、「イヤ申し女中様、いかにお世話でござりました。モウおさらば」とゆふ月に、別を告げて行過ぎしが、何か心に點頭きて、木蔭に忍び窺ふとも、知らぬ目しひの悲しさに、思はず小屋をまろび出で、乳母の行方はそなたぞと、見えぬながらに延上り、「コレイノコレ浅香、今云うたは偽り、尋ぬる深雪はわしぢやわいの。聲を聞いた其

時は、飛立つやうにあつたれどもな、あさましいくこの形で、ドウマア、顔が合はされう。とは云ひながらわしが身を、よくく大事と思へばこそ、海山こえて憂苦勞、廻りあひは逢ひながら、胴欲にもよそくしう、云うていなした心の内、マ、、、どの様にあるぞいの。只何事も是までの、約束事と諦めて、コレ堪忍してたもくや。取分けて悲しいは、是程不孝な此わしを、やつぱり子ぢやと思し召し、身の徒を苦にやんで、お果てなされた母様の、死目にあはぬのみならず、御命日さへつゆ知らず、はかない事が、エ、マあるかいなう。思へばく浅ましや、親々の罪ばかりでも、目が潰れいで何とせう。赦してたべ」とばかりにて、こらへくし溜涙、わつと叫びて身をなけ伏し、前後正體なき沈む。立ち聞く浅香も忍びかね、わつと一聲泣出せば、扱はそこにと深雪が驚き、こけつ轉びつ逃行くを、繩り止めて聲ふるはし、「コレマアく待つて下さんせいなう。姿形はかはつても、一目にも見違へねども、名のりかけてもなかくに、明さぬ氣質と知つた故、餘所事に云ひなして、木蔭に隠れて始終の様子、立聞きしたも盡きせぬ縁。さりながら此年月骨身を碎き、やうく尋逢うたもの、心強ういなさうとは、そりや胴欲ぢやく。エ、聞えませぬはいなア」「エ、其恨は理ながら、今も今とて云ふ通り、身の徒で此様に、落ちぶれ果てた形かたち、どうマアそれと名乗られう。わしが心の

悲しさを、思ひやつてかんならず、呵つてたもるな誤つた」と、縋り歎けば、「チ、何のマア
 呵りませう。たとへどのやうにお成りなされても、廻り逢うたがわしや嬉しい。とは云ふもの
 の是は又、あんまりな落ちぶれやう、日頃の辛苦が思ひやられて、わしやく、此胸が裂けるやう
 にござりますはいなう。シタガコレ、お氣遣なされますな、私が産の親古部三郎兵衛といふ人、
 小夜の中山の邊にながらへて居さんすとの事。肌身放さぬ守刀、それを證據に廻り逢ひ、阿曾
 次郎様の有所を尋ね、きつとお逢はせ申しましょ。ガ、何をいうても此處は街道、宿ある方へ急
 がん」と、泣入る深雪いたはりて、立上る折こそあれ、夜道ほかく、輪抜吉兵衛、よい事がな
 と蚤とり眼、二人がそぶり物ぐさしと、傍へ立寄り提灯の、火影に深雪が顔打眺め、「ヨウ、わ
 りやいつぞや摩耶の婆に、百兩で直を極めた娘、いつの間にも亂れてかくれにはなりをつたぞい。
 しかし醫者にかけてら治らぬ事もあるまい。何分元手いらすの勝負物、ドレ拾うてやる」と手
 を取るを、浅香は引退け氣色をかへ、「ヤア女と思ひ、慮外しやると許しはせじ」と杖押取り、
 仕込みし刀抜きかくる、其手を押へて、「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、こりややい、輪抜吉兵衛というて
 な、日本國を股にかける人買商賣、鯉かきひねくり廻しても、びくともする男ぢやないは。ほ
 ろその下つた亂れせうより、賣られて絹のべと著い」と、てうける詞聞きかねて、「イヤ推參

な勾引、見事賣るなら賣つて見や」と、抜放して切込む刀、さしつたりと身をかはし、もう百
 年目と輪抜も、同じく旅差抜放し、「觀念せよ」と切結ぶ。深雪はあせれど盲目の、何とせん方
 なみ木原、二人は打合ふ月明り、こよを詮とぞ三重挑みあふ。いかどはしけんわな抜が、石に躓き
 眞逆様、轉ぶを得たりと起しも立てず、肩背も分らぬ滅多切、さしもの悪者七轉八倒、のた打
 ち廻つて死したるは、心地よくこそ見えにけり。浅香はしつかと止めの刀、「サア、く嬉しや
 深雪様、悪者はしとめました」と、いふ内よりも心のたるみ、其儘そこに倒れ伏す。深雪はこ
 はごは探りより、勞はる手先にしたふ血、「ヤア、く、そなたも手疵負やつたか。なう悲し
 や」と抱きかゝへ、「浅香いなう、く」と、聲を限りに呼生くれば、息吹きかへし目を開き、「チ
 ナ深雪様、お身に怪我はなかりしか」「イヤ、くわしは何ともせぬが、そなたの手疵が氣遣ひ
 な、氣を慥に持つてたも」と、取付き歎けば、「ア、コレ聲が高い。わたしはほんのかすり手、
 氣遣ふことはござりませぬ。ガ、もしもの事が有つた時は、最前申した古部三郎兵衛といふ人に、
 此守を證據に廻り合ひ、今宵の譯をお咄しあつて、何かの事をお頼あれ、必ずお忘れ遊ばすナ。
 ヤ、誰も見ぬうちサアお出」と、刀を納め深雪が背に、負はすも涙ふる三味の、いつかむかし
 にかへらう尾、いとどもつるよ心をば、てんじかへても手疵のいたみ、盲目ならぬ我身さへ、

杖を力に立上り、女心も張りつめし、弓はり月に夜半の鐘、つくす忠義の一筋道、伴ひてこそ急ぎ行く。

宿屋の段口

行雲に足竝早き雲助が、拵ぎ隙なき東海道、傳馬人足歩荷物、吸付け歩む煙草さへ、五十三次打ちつどく、中に賑ふ島田の宿、所名うてに内證よし、名さへ戎や徳右衛門、老舗も廣き十間間口、店は講札講印を、掛け渡したる暖簾も、風にひらめく吹付くる、繁昌類ひなかりける。逗留客の萩の祐仙、一間の内より歩み出で、「コレく女中衆、ちよと尋ねたいことが有る、ヤ外のこともないが、奥の客人は中國大内家の御用人方である。ソレなれば、萩の祐仙でござる、ちよとお目にかゝりたいと申してくりやれ」「ハイく、呼びまして上げませう」と、お鍋は立つて入りにけり。斯くとしらせに岩代多喜太、一間より立出づれば、「コレハく岩代様、先以つて御健勝で」「チ、誰かと思へば萩の祐仙、久々對面。身どもに逢ひたいとはいかなる事」「サレバく、先達ての御狀にては、新參の駒澤が諫言にて、殿には御本心になられ、運八殿の最期の由、それに 卽 立蕃様よりの御狀」と、渡せば受取り一見し、「チ、大儀々々。身どもとて

も何かにつけて邪魔になる駒澤め、何とぞ密に害せんと、昨日海道にて笹久藏といふ浪人を連れ歸り、委細の密事を申含め、奥の間の下やへ忍ばせ置いた」「ヤそれはよい手筈。もし其手でいかぬ時は、下拙が手製の、コ、コレ此痺薬を薄茶に交せて飲ます時は、忽ち五體しびれて死人も同然、刺殺すに手間隙いらす。又此丸薬は則ち解薬、これを先へ吞置けば、少しも酔はざる大妙薬。ガ、時に申さぬ事は聞えませぬが、首尾よう參れば御はうびを、ハ、づつしりと戴きたう存じます」「チ、出かすく。先これは當座の褒美」と差出せば押戴き、「コレハく、忝い。何かは後程」「チ、萬事ぬかりのない様」と、云ひつゝ立つて岩代は、元の座敷へ入りにける。跡に祐仙獨笑、「旨いぞく、當座の褒美が先づ拾兩。さらば是から湯の仕掛」と、云ひつゝあたり見廻して、件の薬を湯の中へ、そつとほり込み蓋びつしやり、「斯うして置いて駒澤が、戻り次第にふり立てて、我等が先へ服加減、解薬の丸子でしらしん、駒澤めは忽ちぐにやくぐにやく」と、悦び勇む其所へ、奥より息急き下女お鍋、「申しく、奥のお客がお呼びなさる、早う早う」とせり立つる、聲に悔り祐仙は、そしらぬ顔で奥へ入る。始終窺ひ徳右衛門、そろく出でて跡打ながめ、「最前から様子を聞けば、何やら怪しいアノ薬、駒澤様へ申上けうか。イヤイヤ夫では却て當り障り、どうぞよい思案が有りさうなものぢや。オ、ソレヨ、昨日松原で買う

て置いた笑ひ樂、アノ鐵瓶の湯をかへて、オ、さうぢやく〜と手早に懐中の、薬をふり込み蓋をしめ、「かうして置いてまさかの時は、オットよしく〜」と、心で點き徳右衛門、勝手へこそは入りにけり。かゝる折から立歸る駒澤治郎左衛門、足音ソツトいはしろ多喜太、祐仙伴ひ出で迎ひ、「コレハ〜駒澤氏嘸御疲れ、先々是へ。イヤナニ祐仙、其方は平生茶好、定て茶箱も用意しつらん、ソレ駒澤殿へ一服立て進ませませい」と、云ふに祐仙空とほけ、「コレハ〜岩代様、私風情の麓茶を御所望とは冥加ない。殊にあなた様は」ヲ、サ、是が即駒澤氏、殿御歸國の先觸、宿々の駈引にて只今御歸宿、御遠慮深いお人、されども元來茶の道には御執心、用意の薄茶、サ、所望だ〜」ハ、コレハ〜、なか〜あなた様へ上げますやうな茶ではござりませねど、御所望とは身の面目、苦しからずば何服なりと召上られ下されう〜と、追従たら〜立上り、茶箱取出し毒藥の、工みの裏をかよれしとも、知らぬ手前のしかつべらしく、振立てて差出せば、岩代多喜太詞を改め、「イヤ駒澤氏」と取次ぐ所へ、「ヤ先々暫〜」と徳右衛門、「恐ながら」と座敷へ出で、「憚ながら旦那様、いかどしい申し事ながら、數代お出入の殿様の、御家來たるあなた方、私方で煮焚の物は、此度に限らず、吟味に吟味を致した上差上げませねば、千に一つ龜相がござりました時は、此徳右衛門めが越度、泊り合したあなたのお茶、サ御如才

の有らう様はなけれども、めつたには、ナ申し」と、目顔で知らせば岩代多喜太、「ヤアいらざるうぬが馬鹿念、身が入魂の萩の祐仙、茶に毒藥でも仕込みあるかと疑うて申すのか」ア、イヤ、全く左様ではござりませねど」ム、然らば差止めた駒澤殿の手前といひ、サ今一言いつて見よ、眞二つに打放す」と、きつば廻せば祐仙押止め、「ア、イヤ、先々お待ちなされませ、エ工貴公様の御立腹は御尤なれど、徳右衛門の申す所も又一理あり。ヤかう致そ、下拙が毒見仕り、其上にて駒澤様へさし上げませう。何と徳右衛門、それで云分は有るまいがや」イヤモ御自分にお毒見なされる程、慥な事はござりませぬ」ヲ、さう有らう〜。ガ、其替り何事もない時は、此祐仙が了簡せぬが合點か」ヤモ夫はせひに及びませぬ、御存分に成りませう」ヲ、面白〜。きつと詞をつがうたぞよ。ドレ毒味を致さう」と、茶碗取寄せ、そこらをきよ〜見る振にて、解藥の丸子そうと呑み、さあらぬ顔して件の薄茶、雫も残さず呑み盡し、「ヲ、ヲ、イヤ、徳右衛門、ちよつと出やサ。見たか、此通りぢや徳右衛門。是でも別條が有るか、サど〜うぢや」と、己が工みの藥とは、取替へありとは夢にも知らず、「サア徳右衛門、ヤ戎や徳右衛門、えび徳、約束ぢや夫へ、ム、ム、ム、ム、直れ〜」イヤモ段々誤り入りました、眞牛御免下さりませ」ヤ何ぢや、ム、ム、ム、ム、御免下されいも氣が強いわい。ハ、ハ、ハ、ハ、

ハ、、、エ、をかさないぞく。エへ、ハ、、、ハ、、、コリヤヤイ徳右衛門了簡ならぬぞ。
 ハ、、、ハ、、、汝マア、是なりに濟まさう。ハ、、、ハ、、、あまりの事で腹がよれるは
 い、ハ、、、ハ、、、一體こりや何のことぢやい。ハ、、、ハ、、、何ぢや知らぬが、無
 性にをかしく成つてきたはい。ハ、、、アハ、、、ハ、、、」岩代見かねて、「コリヤく、祐仙
 をかしくもない事笑はずと、早く駒澤殿へ差上げぬか」「ハイ、ハ、、、ハ、、、成程々々、
 ハ、、、ハ、、、只今差上げますはい。ハ、、、ハ、、、暫くお待ち下され。ハ、、、ハ、、、
 ハ、、、ハテめんような。ハ、、、ハ、、、笑ふまいと思ふ程猶ハ、、、ハ、、、コリヤ
 たまらん、臍が裂ける。ハ、、、ハ、、、」「ヤイく、たわけ者め、何が其やうにをかしい。
 身どもは格別、駒澤殿へ無禮であらうぞ」「ハイ、ハ、、、ハ、、、左様にお腹は立てられな、
 下拙も笑ひたいことはないけれど、ハ、、、ハ、、、何か腹の底から涌出るやうに、ハ、
 ハ、、、ハ、、、是では徳右衛門へ押がきかん。ハ、、、ハ、、、ア、苦しい、堪忍してくれ、
 誤つたく。ハ、、、ハ、、、イヤく、心を取直し、モウ笑はんぞ。おれも男ぢや、笑はん
 というたら笑はん、おれを誰ぢやと思ふ、萩の祐仙様ぢや。何のその、何ぢや云うて居るは、
 ソンナぢやないく。ハ、、、ハ、、、コレく、徳右衛門、中直りせう程に、ハ、、、ハ、、、

ハ、、、其替り醫者を呼んで、ハ、、、ハ、、、醫者が醫者を頼むは卑怯なれど、是はおれ
 が手療治ではいかんわい。ハ、、、ハ、、、コリヤ何でも笑癩といふ物かしらん。ハ、、、
 ハ、、、コリヤ徳右衛門、もう何にも云はぬ、誤つたく。ハ、、、ハ、、、早う醫者を
 呼んでくれ、腹が立つ程をかしいわい。ハ、、、ハ、、、エ、忌々しいわい。ハ、、、ハ、
 ハ、、、肺の臓も腎の臓も、腹の中で宿替するやうな。ハ、、、ハ、、、チ、イ宿替待つてく
 れ、付物の應對もせにやならん。ハ、、、ハ、、、コリヤモウ五臓六腑が、チヨイちよい踊
 り初めた」と、すり替へた薬故とはいざ知らず、果は茶箱も蹴ちらして、笑ひ入るこそ正體な
 き、姿に鞞れ岩代多喜太、はかり戎や徳右衛門、をかしさ隠すばかりなり。短氣の岩代ぐつと
 せき上げ、「ヤア大馬鹿者の萩の祐仙、笑ひ止まずば手は見せぬ」と、力身かへれば恟りし
 ながら、手を合しても止らぬ笑ひ、「ハ、、、めつさうなく、ハ、、、御オホ、了、オホ
 ホ、、、簡ム、、、アハ、、、」と、詫びる詞もあやちなく、笑ひ薬の利目とは、知らぬ祐仙
 息はずませ、轉けつ笑ひつハ、、、、逆けて行く。案に相違の岩代は、鞞れ果てたる佛頂頬「エ、
 様々の馬鹿者にかより、湯に入るを忘れた。ヤイ亭主め、うぬよく邪魔を。ヤイきりく、風呂へ
 案内ひろけ」と、それとも得いはすむしやくしや腹、席を蹴立てて廊下口、跡に心をおくの間

の、我座敷へと駒澤も、座を立つてこそ入りにける。

宿屋の段

何國にも、暫しは旅とつどりけん、昔の人の筆の跡、つれづれ詫びる假の宿、夜の襖のすきも
 りて、風にまたよく燈火の、影も淋しき奥の間へ、立歸る次郎左衛門、何心なく座をしめて、ふ
 つと目に付く衝立の、張ませの歌讀下し、「テ心得ぬ、此張ませにある地紙の歌は、先年山城の
 宇治にて、秋月が娘深雪が扇に、某が、また逢ふまでの形見にと、書いて與へし朝顔の歌。其後
 計らず明石にて、船がかりせし其砌、琴に合はして深雪が節付、折ふし思はぬ互の出船、あ
 かぬ別れを悲しみて、女の手づから我船へ、投込みし此扇。然るに今又此家にて、思はずも此張
 交。ア何者が諷ひ傳へて、計らず東の驛路に、見るもふしぎ」と獨言、其折からの忍ばれて、
 詠め入つたる時しもあれ、襖押開け徳右衛門、小腰かどめて入來れば、こなたも扇押隠し、「オ
 オ亭主、先刻は扱もきつい働き、危き難を遁れしも、全くそちが志、サ是へく」「ハ、冥加
 に餘る御詞。エ、最前こなたへ參る砌、何か三人ひそく咄し、合點行かすと忍び聞けば、し
 びれ藥を茶に交せて、あなた様へ差上げんとの」「ア、コリヤ」「サア恐ろしい工み。エ、憎さ

も憎し、直に申上げうと存じたれど、それではどの様な科人が、出來うも知れぬと存じ、へ、
 幸先日 慰に求めました笑ひ藥、ヤコレ幸としびれ藥と取りかへたを、知らずに呑んださつき
 の時宜、此後とても旦那様、御油断は成りませぬぞえ」「ホ、其儀は某もとく承知致した。マ
 それは格別、此衝立にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、どういふ事からお身が手に入りしぞ」「エ
 エそれでござりまするか、其歌に付いて、ア哀れな咄し。エ、元は中國邊、歴々の娘さうなが、
 何やら尋る人があるとして、親元を家出し、それより方々と流浪して、果はとうく目を泣潰し、
 跡の月までは濱松邊に其歌を諷うて袖乞。所に又國元から、所縁の女子が尋ねてきて逢ひまし
 た、が、其女子も程なう病死。夫から又ひとり法師、此邊まで其歌を諷うて歩きました、何が
 盲目でこそあれ、器量はよし、聲はよし、見る程の者がいぢらしがり、朝顔々々というて、其
 歌を知らぬ者はござりませぬ。私も餘の不便さに、此宿に足を留めさせ、今では宿やぐのお
 客の伽、何とマア不仕合な者も有るものでござります」と、涙片手の物語も、心にひしくこ
 たゆる駒澤、もし云ひかはせし我妻かと、轟く胸を押ししづめ、「ム、夫は扱哀れな咄。身も
 今宵は何とやら物淋しい、鬱散の爲其女を呼寄する事は成るまいか」「イヤモ何が扱お安いと、
 只今呼びに遣します、お慰みに琴か三味」「ム、何分よきに頼み入る」と、云ふは子細の

有りぞとも、知らぬ佛氣徳右衛門、尻がるにこそ立つて行く。跡へ相役岩代多喜太、のさく
 と座に直り、「ヤ駒澤氏、嘸御退屈でござらう」「コレハく、岩代氏、事の外お早いことござ
 る」と、うはべは解けてもとけやらぬ、前垂かけの下女お鍋、次の間に手をつかへ、「只今朝顔
 どのが見えました、是へ通しましよかいな」「ナニ朝顔とは何者」「アイヤ此道中で琴三味を弾
 き、旅の徒然を慰さむる瞽女とやら。拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞かうと存
 じ、亭主を頼み呼寄せましてござる」「アイヤそりや止めになされい」「トハ又なぜな」「サ
 レバサ、先刻身どもが知音たる萩の祐仙、同席いかどいはれた貴殿、乞食をば座敷へは通さ
 れまいかい」「ハテ高の知れた目くら女、まんざら怪しい、ナソレ茶箱も持参致すまい」と、し
 つべいがへしにぎつくりと、言句に詰まれどへらず口、「左程御所望ならば兎も角も、併しざし
 きへは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと弾かし召されて、早く此場をほつ歸されよ」と、
 飽まで意地持つねぢけ者、寄らず障らず駒澤が、指圖にお鍋が心得て、「朝顔どの召しまする、
 朝顔どのく」と、呼立つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身にもる、歎きの數の重りて、
 峙失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし、淺香はもろく朝露と、消残りたる身一つを、さすがに捨
 てもえん先の、飛石探る足元も、危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、漸坐して手をつか

へ、召しましたは此お座敷でござりまするか、拙いしらべもお笑ひ草、おはもじさまや」と會釋す
 る、顔も深雪がなれの果、不便の者やとせぐりくる、涙香込み扣へ居る。岩代はそれとも知らず、
 「ヤア見ぐるしい其さまで、我々が目通りへうせたは、聞及んだ朝顔めなエ、きりく立つてう
 せをらう」「アイヤく、岩代氏、さうもぎだうに仰せられな。此方に呼寄せたればこそ、思ひ
 がけなう、アイヤ思ひがけなう来たものを、呵るは武士の情にあらず。コリヤく、女、大儀な
 がら其朝顔とやらの歌、サ、早く諷うてきかせい」と、望む心は千萬無量。知らぬ岩代つら膨ら
 し、「扱々駒澤氏にはイヤモきつい御執心。コリヤく、目くら、何なりとも諷へく」「サ、早
 く早く」「ハイく、諷ひまするでござります」と、こがると夫のあるごとも、知らぬ目くらの
 探り手に、戀ゆる心つくし琴、誰かは憂きを斗爲巾の、糸より細き指先に、さす爪さへも八つ
 橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ、ウツ露のひぬまの朝顔を、てらす日かけの
 つれなきに、あはれ一むら雨の、はらくと降れかし。「ム、夫を慕ふ音律の、我々が身にも思
 ひやられて、思はずも感涙致した。ナウ岩代殿」「いか様、琴といひ器量と云ひ、イヤモ中々感
 心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲、サアく
 所望だく」「アイヤ岩代殿、もう赦しておやりなされい」「さりとては駒澤氏、身どもが望むを

止めさつしやるは、ソリヤ意地の悪いと申すもの。「イヤさうではござらねど、彼も定めて勞れませうと存じて」ハア、然らば曲は止にして。コリヤ〜女、そちも腹からの非人でもあるまい、身の上咄しも又一興、咄して聞かせ、サ、どうだ〜「ハイ〜、よう問うて下さりませ、お詞にあまへ、お咄し申すも恥しながら、元私は中國生れ、様子あつて上方住居、過ぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に、思ひ初めたる戀人と、語らふ間さへなつの夜の、短い契りのほいない別れ。所尋ぬる便さへ、思ふに任せぬ國の迎ひ、親々にいざなはれ、難波の浦を船出して、身を盡したる憂き思ひ、ないてあかしの風待に、たま〜逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國へ歸れば父母の、思ひも寄らぬ夫定め、立つる操を破らじと、屋鋪を抜けて数々の、憂き目をしのび都路へ、登つて聞けば其人は、東の旅と聞く悲しさ。又も都を迷ひ出で、いつかは廻りあふ坂の、關路を跡に近江路や、みのをはりさへ定めなく、戀し〜に目を泣潰し、物のあいろも水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世いかなる報いにて、重ね〜の歎きの數、憐みたまへ」とばかりにて、聲を忍びて歎きける。「テ扱哀れな咄し、併し男日照もない世界に、エ、氣のせまい女だな。イヤもうしゆんだ咄しで氣がめいつた、寢酒でもたべ氣を晴さう。イヤナニ女、暇をくれる、立歸れ」「ハイ〜、有り難う

ござります。左様なればお客様、もうお暇申します」「テ、朝顔とやら大儀で有つた。初めて聞いた身の上咄し、若し其夫が聞かならば、嘸満足に思ふであらう。ノウ岩代殿」「左様々々」「ハ、ア、是はマア御深切なお詞、有り難う存じます」と、杖探り取りながら、むしが知らすか何とやら、耳に残りし情の詞、名残惜しさに泣く〜も、心は跡に探り行く。折しも奥より若侍、「最早餘程深更に及び候、御兩所共に早お休み」「いか様明日は正七つの出立、イザ駒澤氏、お休みなされぬか」「イヤ拙者は今暫し用事もござれば、お構ひなくまづお先へ」「ふせらう、御免下されう」と、立上りしが胸に一物、心を跡におくの間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅しと駒澤は、手を打ならし女を呼び、「コリヤ〜徳右衛門に急に對面したし、呼んでくりやれ」と云附けやり、旅硯の墨磨り流し、以前の扇押開いて、何か書きつけ用意の金子、藥の包、取認める目の先へ、疊を貫く白刃の切先、氣轉の駒澤有合ふ温湯、刀にそよけば血汐と心得、してやつたりと縁の下、壁踏やぶり顯れ出づる色久藏、「曲者やらぬ」と治郎左衛門、投打つ茶碗の眼つぶし、たじろぎながら不敵の久藏、「覺悟ひろけ」と切付くる、刃を恐れぬ扇のあしらひ、廊下づたひに來かよる亭主、コハ何事と窺ふ内、難なく刀打落し、取るなり切るなり途端の拍子、首ははるかに飛びちつたり。思はず知らず徳右衛門、「ヤレあつぱれ御手の

内。シタガ此奴何者でござります」「ホ、ウ某を欺討にせんと、飛んで火に入る夏の蟲。ハ、ハ、死骸はよきに頼み入る」「ハ、アお氣遣ひなされますな。ガ、只今召しましたは何の御用でござります」「チ、徳右衛門、折入つて頼みたきは、先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼寄せてたもるまいか」「ハイ畏りましてはござりますが、彼は直に清水と申す方へ参りました、御用事ならば呼びには遣はしませうが、エ、どうで今夜はお間には」「ム、ハテ残念至極。身は正七つの出立、マよく縁の」「エ、何と御意なされます」「アイヤナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲、此三品を其方にしつかりと預け置く間、朝顔が参らば渡してくりやれ」「ハイハイ、オ、コリヤマアおびたどしいお金、其上結構な女子扇、お薬までも」「チ、サ、其薬は大明國秘法の目薬、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、いかなる眼病も即座に平癒。朝顔に渡してくりやれ」「コレハ、何から何まで、心をこめられた下され物、参り次第相渡し悦ばせましょ」と、受取る折しも時計の七つ。「ム、アリヤもう七つの刻限」と、かぞふる内に岩代多喜太、装束改め旅出立、同勢引連れ立出でて、「イザ駒澤氏、出立仕らうか」と、勸むる詞に治郎左衛門、衣服繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞、心そぐはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出でて行く。跡見送つて徳右衛門、「ハア、同じ侍でも黒白の違ひ、意地く

ね悪い岩代に引きかへ、情深い駒澤殿、ア、あつぱれの侍ぢやな。ヤそれはさうと、朝顔に今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ様子の有りそな事」と、思案の折から、深雪は何か氣にかかり、座敷しまうてうとくと、又立歸る切戸の内、徳右衛門目早に見て、「オ、朝顔か、遅かつた。宵のお客様が最一度呼びにやつてくれいとおつしやつたれど、清水へ往たと聞いた故、お断申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦びや、大まいのお金と扇、又結構な目薬まで、わがみに遣つてくれいとお預けなされたはいの」「是は冥加に餘ること、お禮申さいで残り多い。ガ、申し、旦那様、此扇に何ぞ書いてはござりませぬか、ちよつと見て下さりませ」「オ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔、露のひぬまが書いて有る、裏に宮城阿會次郎事、駒澤次郎左衛門と書いて有るぞや」「エ、アノ、宮城阿會次郎事駒澤次郎左衛門と其扇に」「チイノ」「ハ、ア」はつとばかりに俄の仰天、「エ、知らなんだく、わいな。道理でよう似た聲と思うたが、そんならやつぱり阿會次郎様で有つたか。申し、旦那様、其お客様はいつお立ちなされたえ」「チ、今の先のことぢや。ガわがみは又おなじみか」「エ、なじみ所か、年月尋ぬる夫でござんすはいな。かういふ内も心がせく、追付いてたつた一言」と、行かんとするを引止め、「ア、コレく、マア、待ちやく。エ、折悪う雨も降出し、此暗いに一

人はあぶないく「イエくくたとへ死んでもいとひはせぬ」「サ、それはさうでも目
くらの身で、あぶないく「イヤ放してく」と、突退け、退け杖を力に降る雨も、いつかない
とはぬ女の念力、跡をしたうて追うて行く。名に高き街道一の大井川、篠を亂して降る雨に、
打交りたるはたよがみ、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじく、夫をしたふ念力に、道の
難所も見えぬ目も、いとほぬ深雪が、こけつ轉びつ、やうく爰に川の傍、「ナウ川越達、駒澤次
郎左衛門様と云ふお侍、もう川をお越しなされたかまだか、聞かしてく」と、いふ聲さへも
息切の、聲に川越口々に、「チ、其侍は今の先渡つた。ガ、俄の大水で川が留つた。笑止々々」と
ばかりにて、皆ちりぐに行き過ぐる。「ヤアナニ川が留つた。ハ、ア悲しや」と張詰めし、力
も落ちて伏轉び、前後不覺に泣きけるが、又起直つて見えぬ目に、空をにらんで、「天道様、エ、
聞えませぬくくはいな。此年月の艱難辛苦も、どうぞ最一度其人に、逢はしてたべと片
時も、祈らぬ間とてもないものを、けふに限つて此大雨、川留とはく、エ、何事ぞいの。思
へば此身は先の世で、いかなることを罪せしぞ、扱もくあぢきななき。こがれくた其人に、逢
うても知らぬ盲目の、此身はいかなる悪業ぞや。夫の跡を戀ひしたひ、石に成つたる松浦瀧、
ひれふる山の悲しみも、身にくらぶれては數ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果が又と

世に、有るべきかは」とくどき立て、拳をにぎり身をふるはし、泣涕こがれ歎きしは、餘所の
見る目も哀れなり。やとあつて起直り、「オ、さうぢやく。とても添はれぬ身の業因、此川
水の増りしは、所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを楽しみに、爰を三途の岸と定め、弘誓
の船にのりの道、急がんもの」と、泣くくも、夫を戀しいしの數、袖や袂に拾ひこみ、「なむ
あみだ佛の聲諸共、既に飛ばんとする所へ、「ヤレお待ちなされ深雪様」と、聲に悔りけしとむ
内、駈來る關助徳右衛門、あわてし儘のかちはだし、斯くと見るより抱止め、「マアくお侍
ちなされませ」「イヤく、誰かは知らねど、放してく」「マアく待たしやれ朝顔殿。チ
チわしもこなさんの身が氣遣ひさに走つて來た。コレ關助殿とやらが見えたぞや」「ハ、ア下
郎めでごはります」と、無理に手を取り抱退ければ、「ム、さういふ聲は關助か」「ハ、ア」「エ
エ遅かつたくくわいの。此年月の艱難して、尋ねこがれた阿曾次郎様に、折角逢うたに目く
らの悲しさ、それとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかより、戻つて聞けばやつぱり世
人。おのれやれ追付うと、跡追うて來たれば此川留。エ、どうせうぞいなうくく」「チ、お道
理だくく。拙者めもあなた様の行方を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に浅香殿に逢ひ、則ちあ
なた様は島田の宿、戎や徳右衛門方にござると云はしやると思へば目が覺め、シヤ何でもふしぎ

と夜を日に繼いで参つたかひ有つて、すつてのことに危ない所を、ヤレく嬉しや、下郎めがお目にかよる上は、お氣遣ひなされますな、駒澤様に添はせ申す。併し浅香殿は坂東順禮と成つて、東海道へ尋ねて見える筈、がお逢ひなされしかな」「サレバイノ、其浅香に跡の月、濱松で廻り逢うたが、其夜悪者に出合ひ、數か所の手疵、死ぬる今はにわしを呼び、中山の邊には、私が産の親古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守刀を證據に尋行き、秋月弓之助が娘と名のつて逢へとをしへ、可愛やつひに死にやつたはいの」「ム、スリヤ浅香殿には最期とや」「ホイはつとばかり驚く内、始終聞きある徳右衛門、「ム、そんならおまへは秋月弓之助様の御息女様、又浅香と云ふは我娘で有つたか。マア私事は、其尋ねなされるよ古部三郎兵衛と申す者、則あなた様の祖父秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き、産落せしが女子の子、貧苦の中に育つる内、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へ此短刀を添へて養子にやりしが、廻りくつて思はずも、親が命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず導きをつたか。オ、出かしておつたな、此上は深雪様へ、三郎兵衛がお土産」と、件の短刀拔放し、腹にぐつと突立つれば、關助驚き押し止め、「コレ、何でこなたは此最期、死んでお役に立つことか、譯を聞かして下

され」と、いへばくるしき聲を上げ、「ヤレ歎かれなかつた。最前駒澤様の物語、唐土傳來の目薬、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も即座に平癒との事。某甲子の生れなれば、我血汐をもつて件の薬を調合し、早くあなたへお進めなされ。サ早くく」實もと關助用意の水香取出し、手負の血汐受止めく、泣入る深雪が懐の、妙薬取出し差寄せば、深雪受取り、「わが夫の情にあまる賜」と、押戴きく、只一口に吞干せば、ふしぎや忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見えすくにぞ、深雪が嬉しさ人々も、悦び合ふぞ道理なり。「ア、嬉しや、最早此世に望なし。いづれもさらば」と刀引廻し、笛のくさをりを刎切つて、名のみ流るる大井川、水の泡とぞ成りにけり。跡や枕に取縋り、わつとばかりに泣く深雪、「露のひぬ間の朝顔も、開きし此目は盲龜の浮木うどんけの、花に増りし夫の賜。二つには、我のゑ此世に亡き人か」と、取付き歎くを關助が、勇になき骸手昇の興、早明け渡る鳥の聲、山田の恵いや増り、茂れる朝顔物語、末の世までもいちぢるし。

歸り咲吾妻の路草

咲いた櫻になぜ駒つなく、駒がいさめば花がちるく、その駒澤を戀ひしたふ、櫻にあらで朝

顔が、姿も昔にかへり咲、髪も島田とたつか弓、引きも契らぬ海道に、誰も人目を大井川、跡に見附や濱松の、憂き艱難に引きかへて、昔語とあらひかへ、白すかかけて二川や、かいしよらしけにちよこくくと、あゆみし姿も吉田御油、赤坂宿を打過ぎて、藤川繩手に休らひけり。「オ、ほんにわしとしたことが、夫に逢ふが嬉しさに、供も構はずうかくと、先へ歩むと思ひしが、此關助は何してぞ。オ、イ〜」と打招けば、跡におくれて關助が、雙紙の鎗をふりかたけ、「アリヤサ、コリヤサ、ヨイヤサ、とつかけべい、先退ける。お鍋がかい餅ねれたら持てこい合點ぢや。ゆうべも三百張込んだ、してこいな、どつこい振れ〜ふりこんだ。戀し殿御はあれでもないか、是でもないか。ナイ〜。似ぬこそ道理違うたく、違はぬものは貞女と忠義、追付け廻りをか崎や、やがて鳴海」と關助が、縁起祝ひし言の葉に、深雪嬉しく、「オオ關助か遅かりし、そなたを跡にふり捨てて、歩むも女のまんがちと、嘸や心にをかしかる。面目ない」と詫言に、「何が扱〜、拙者めもあなた様の御供申し、駒澤様と御祝言あるやうに、此跡の宿の氏神は、縁結びと聞きし故、心願こめて」「チ、それは嬉しいさりながら、そなたもかねて知る通り、夫に添はれぬ因果の縁、死ぬる所を助かりて、二度東の我夫に、逢へばどうしてかうしてと、心はちどめもつれ合ひ、しめてからんだ松の蔦、其みどりの子を産み落し、

ねん〜ころよんや、ねんねが守はどこへいた。どことは知れた其人に、逢うて恨をなんとまあ、どう云うてよかるやら、なんとしやう野の憂き思ひ」「チ、お道理〜。あなた様より關助が、三々くどうはござれども、追付け婚儀の取結び、其時髭めは晴奉公、ふり込〜御祝儀の、なかに見事は花の鐘、駒の手綱をひかへづな、揃へやり持花の鐘、竝松の音もゆたかに、ザ、ンザ〜、シャン〜、しやんと納めた。ハ、ハ、ハ、勇み笑うて行く先は、伊勢路と伊賀の國境、榮を榮ふる坂の下、里の童が聲々に、「朝顔の、あしたに咲いて夕には、露の命も戀故ならば、わたしや厭はぬいとやせぬ。ソレ〜さうぢやいな〜。朝顔の名にこそ立てれ幾秋も、ほんの心も色ゆるならば、わたしやいとほぬいとやせぬ。ソレ〜さうぢやいな〜」諷ふ聲々身の上に、ひつしとおもひ石部川、花香もこもる梅の木を、たどりて急ぐ道の邊に、咲亂れたる朝顔に、むれ飛ぶ蝶のおもしろく、うかれ〜主従が、浪花路さして 三重急ぎ行く。

駒澤上屋舗の段

浮める雲に譬へたる、不義の富貴に引きかへて、月日を拵ふ村雲も、今時を得て晴渡り、新に

造る普請の結構、玉を欺く駒澤が、直なる心のかみやしき、殊に今日は殿のお入とさどめいで、こしち 妣はしたとりぐに、掃除しまうて寄りこぞり、「コレ菊野、けふ殿様のお入とて、此様な結構な御ざしきを掃除して、きれいなことぢやないかいなう」「サイノ其きれいな、次手に、爰の且那次郎左衛門様、此廣い大阪中にも最一人とない器量よし。あんな殿御を夫に持つ、奥様になる人は、仕合せ者ぢやないかいの」と、ちよつと寄つても男の噂、口かしましきは端女の、習とこそは見えにけり。程なく殿様御入と、下部がしらせにこしち 妣ども、「ソリヤコソお成ぢや、且那樣に、申し上げう」と打連れて、皆々奥へ入りにけり。大内之助義興は、さいつ比より東國にて、大友の残黨を誅伐し、本國へ歸館ある。路次の序に駒澤が、上やしきへぞお成ある。お供には岩代多喜太、肩臂いからし入り来る、主駒澤次郎左衛門へり下り頭をさけ、「殿には益御機嫌よく御座遊ばされ、愚臣が弊居へお成とは冥加至極、有り難き仕合」と手をつけば、「此程大友の残黨等、近國に徘徊致すよし、軍慮をめぐらし、只一戦に責討たんと評議まちく。汝も其旨相心得、一乘に勝利を得る術ありや、いかにく」と有りければ、岩代はしやくくり出で、「イヤく、其軍あぶないく、大友の残黨とて侮りがたし。今諸國へ討洩れたる残黨ども、スハ合戦と聞くならば、蟻の如くに集り、蜂の如くに起りなば、ゆよしき大事ならん。サ其時

には味方は小勢、譬へば鶏卵をもつて磐石を打つ様なもの、そんなあぶないことせうより、又大磯へ行つて傾城買が増であらう」と、己が悪事をしらばけに、大た一味の奸曲を、夫と駒澤心にうなづき、「軍の事は跡での評議、先今日は御爵散を晴さん爲、奥の亭にて龜茶一服、獻上いたし奉りたし。いざく御入下さるべし」と、申上ぐれば義興公、しづく立つて入り給ふ。早日も西に傾きて、黄昏近き秋の空、心もいさせき關助が、忠義一圖に深雪をば、伴ふ心にいそくと、やうく爰に著きにけり。關助は小腰をかどめ、「ハイ御免下さりませう、私事は藝州岸戸の家老、秋月弓之介が家來、關助と申す奴めでござります。殿方に御取次下されませう」と、云ふ聲漏れて治郎左衛門、一間の内より立出づる。見るに深雪は飛立つ嬉しさ、なうなつかしや我が夫と、抱きつきたさ今更に、邊りを見やりもぢくと、赤らむ顔の色も香も、盡させぬ奇縁ぞわりなけれ。治郎左衛門打解けて、「イヤナニ、其方が聞及びし關助とやらか、長々の介抱何かの世話、ホ、過分るぞよ。イヤナウ深雪、日外島田の宿にて、ふしぎと廻り逢うたれど、大切なる殿のお供先、同家中の手前と云ひ、わざと其場は知らぬ體。シテ其砌、徳右衛門を頼み、そなたに與へし樂にて、眼病も平癒せしか」と、云へば深雪は今更に、過ぎ來しかたの憂き艱難、思ひ出していらへさへ、涙先立つばかりなり。關助は引取つて、「イ

ヤモ、それに付けてもお咄し申上ぐれば長々しい事。仰の通り少しも違はず御病氣本復、其場所へ参り合せ、直様これまで御供申す。駒澤様の御きけんの體を拜しまして、下郎めは安堵、深雪様には嘸々お嬉しうござりませう」と、互ひに顔を見合せて、悦び合ふこそ道理なる。始終を聞いて治郎左衛門、「ホ、ウ是までかんなん辛苦して、廻り逢うたもつきせぬ縁、幸今日は殿のお成なれば、委細の譯を言上し、おゆるしあつた其上は、友白髪まで添遂けん。ガ、何かの咄しは身が居間で、關助共にまづあがれ」と、詞に二人が飛立つばかり、春待ちかねし鶯が、梅に初音の心地して、悦び入らんとする所へ、「ヤレマテ汝等、内之介義興とくよりは是にて承知せり」と、悠然として立出で給ひ、駒澤に打向ひ、「イヤナニ、夫なる深雪とやらんは、岸戸の家來秋月弓之助が娘とかや、今改めて夫婦となさん、我目通りで祝言せよ。ソレく用意」と御下知に、はつと答へて持出づる長柄の銚子蝶花形、千代も變らぬ高砂の、尾上の松こそめでたけれ。悦び納る其所へ、様子をとつくと岩代多喜太、一間の内よりのさばり出で、「目くら乞食の朝顔も、今では武家の御内寶、前代未聞の此穿鑿。ドリヤ拙者も罷つて又後刻、御祝儀申さん駒澤殿」と、何かな意地持つ詞を残し、立歸らんとする所へ、「ヤアく大友一味の反逆人、そこ動くな」と呼びかけられ、恟りふり向く其所へ、「ヤアく治郎左衛門殿、暫くお控へ下さ

るべし。駒澤三郎春次、夫へ参つて明白に申上げんと、云ひつゝ出づる若侍、見るより岩代詰寄つて、「ヤア汝は幼少の時逐電したる駒澤了庵が實子庄一郎。シテ其方が證人とは」「ホ、ウ某日外摩耶が嶽にて、浮洲の仁三と假名して、大友に付隨ひ、術を以て打亡し、藥王樹を奪返し、守護し奉りて國元へ立歸る其砌、播州舞子の濱の松原にて、山岡玄蕃より、其方へ内通の飛脚に出合ひ、しめ上げて状箱引取り、よくく見れば汝が工み。又先刻其方が懷中より取落したるコレ此一通、開き見れば山口へ合體したる悪事の次第、委細に知れたる此文體」治郎左日外島田の宿にて浪人を語らひ、下屋へ忍ばせ置き、毒藥を以て某を害せんと計る人非人、何と是でも返答ありや」岩代「サアそれは」三郎「此書面の云譯ありや」「サア夫は」「サア、サアくサア返答いかに岩代」と、流るゝ水の辯舌も、實に駒澤了庵が、子息とこそは知られけり。岩代は破れかぶれ、「モウ是迄」と拔放し、切つて懸るを關助隔て、「駒澤様へ御目見えに、汝が首は此奴が、婚禮の御祝儀に貰うてくれん」と立掛る。「ヤアちよございな一文奴、ばらしてくれん」と切掛れば、こなたも心得渡り合ひ、暫く時をぞうつしける。先を取られて岩代は、たじろく所を付け入つて、苦もなく首を打落せば、「ホウ出かしたく」。關助とやら、下郎ながらもあつばれういやつ、以後は三百石を興へ、侍に取立てくれん。又庄一郎は今より、駒澤了助と名を改め、猶

忠勤をはげむべし」と、残る方なき大將の、仰に人々慶儀の感涙、智仁勇ある君子國、例を爰に竹本の、其一ふしに千代こめて、語傳へし物語、文才青き翠松、かはらぬ色の若枝を、鳴らさぬ御代ぞめでたけれ。

生寫朝顔話終

大正十五年七月十七日印刷
大正十五年七月二十日發行

有朋堂文庫
淨瑠璃名作集上 (非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼發行所

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

岡山製本





